森　町

三次郎川左岸遺跡
石倉５遺跡(2)
石倉４遺跡

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成16年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

三次郎川左岸遺跡　遺跡周辺遠景

基本土層

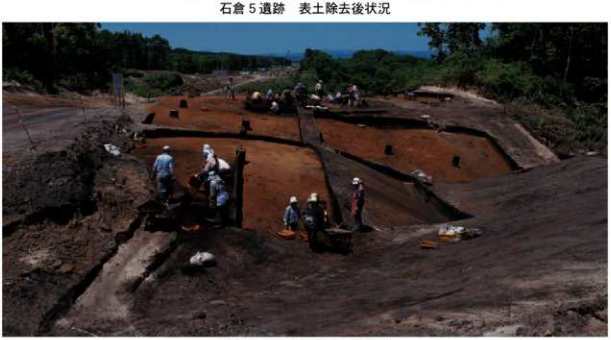
三次郎川左岸遺跡　Ｑラインメインセクション

三次郎川左岸遺跡　Ｐ－１セクション

三次郎川左岸遺跡　Ｆ－１セクション

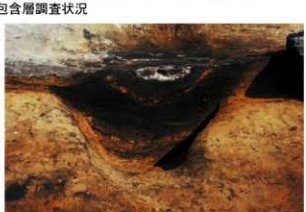
三次郎川左岸遺跡　完掘状況

石倉５遺跡　表土除去後状況



石倉５遺跡　包含層調査状況

石倉５遺跡　Ｐ－１セクション



石倉５遺跡　Ｐ－２セクション

石倉４遺跡　包含層調査状況

石倉４遺跡　71ラインメインセクション

石倉４遺跡　遺物出土状況

石倉４遺跡　Ｆ－１セクション

復元土器集合

例　　言

1．本書は、北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)建設工事に伴い、平成15・16年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した森町三次郎川左岸遺跡、平成16年度に行なった石倉５遺跡、石倉４遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査区の設定は道路公団の工事設計図を基にした。これは函館側を起点にしたものであり、森町内では大きく曲がった路線となっている。このため作成した図面には、地図の基本である「北が上」の体裁をとっていないものがある。

3．本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅵ章：鎌田　望、第Ⅱ～Ⅴ章：鎌田　望・新家水奈が担当した。編集は鎌田が行なった。

4．写真撮影は、現場においては担当調査員が各自の責任において撮影し、新家が一括して写真整理を行なった。整理作業時の遺物撮影は第２調査部第２調査課中山昭大が行なった。

5．調査報告終了後の出土遺物および記録類については森町教育委員会が保管する。

6．調査にあたっては下記の諸機関、各位からご指導ご協力をいただいた(順不同、敬称略)。北海道教育委員会、森町教育委員会、八雲町教育委員会、森町立濁川小学校、森町教育委員会：藤田　登、荻野幸男、上磯町教育委員会：森　靖裕、七飯町歴史館：山田　央、私設北海道考古学研究所：横山英介、苫小牧市博物館・苫小牧市埋蔵文化財調査センター：赤石慎三。

記号等の説明

1．遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。

　P：土坑　　F：焼土

2．遺構図の方位は真北を示す。遺構平面図・メインセクション図の＋はグリッドライン交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構断面図・メインセクション図のセクションレベルは、標高（単位はm)である。

3．遺構図の出土遺物は、下記の記号を使用した。

　種別：底面/覆土の順に記す。

土　器	●/○	剥片石器	▲/△
礫 石 器	▼/▽	剥　片	■/□
礫・礫片	◆/◇	そ の 他	★/☆

4．遺構の最大規模は、「確認面での長軸長×短軸長／底面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深・最大厚（単位はm）の順に記した。一部破壊されているものは現存長を(　)で示し、不明のものは－で示した。

5．実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。

遺　構	1/40	剥片石器	1/2
石　斧	1/2	土 製 品	1/2
土　器	1/3	礫 石 器	1/3

6．土層の表記については、基本土層はローマ数字、遺構の層位はアラビア数字で示した。

7．土層の色調は、『新版標準土色帖2002年版』（小川・竹原　2002）に従った。

8．火山灰の略号は、『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会　1982）による。

9．土器、石器、土製品、石製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。破損しているものは現存長を(　)で示した。なお、実測図中において、たたき痕は∨－∨、すり痕は←→で範囲を表した。

目　　次

口　絵
例　言
記号等の説明
目　次
挿図目次
表 目 次
写真図版目次

Ⅰ　調査の概要
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査にいたる経緯 …… 3
4　遺跡の位置と環境 …… 3
5　周辺の遺跡 …… 5
6　調査の概要 …… 8
(1)　三次郎川左岸遺跡 …… 8
(2)　石倉５遺跡 …… 8
(3)　石倉４遺跡 …… 8

Ⅱ　調査の方法
1　調査区の設定と座標値 ……11
2　発掘調査の方法 ……11
3　整理の方法 ……14
(1)　一次整理 ……14
(2)　二次整理 ……14
(3)　記録類・遺物の収納・保管 ……14
4　土層の区分 ……15
(1)　観察項目と記載順序 ……15
(2)　基本層序 ……15
5　遺物の分類 ……24
(1)　土　器 ……24
(2)　石器等 ……25

Ⅲ　三次郎川左岸遺跡
1　概　要 ……26
2　遺　構 ……26
3　包含層出土の遺物 ……28
(1)　土　器 ……28
(2)　石器等 ……35

Ⅳ　石倉５遺跡
1　概　要 ……37
2　遺　構 ……37
3　包含層出土の遺物 ……39
(1)　土　器 ……39
(2)　石器等 ……42

Ⅴ　石倉４遺跡
1　概　要 ……45
2　遺　構 ……45
3　包含層出土の遺物 ……46
(1)　土　器 ……46
(2)　石器等 ……48

Ⅵ　まとめ
1　三次郎川左岸遺跡 ……51
2　石倉５遺跡 ……51
3　石倉４遺跡 ……52

写真図版

引用・参考文献
報告書抄録

挿　図　目　次

Ⅰ　調査の概要

図Ⅰ－１　森町の位置と遺跡の位置 …… 2
図Ⅰ－２　遺跡周辺の旧地形図 …… 4
図Ⅰ－３　周辺の遺跡 …… 6
図Ⅰ－４　調査開始面地形図 …… 9
図Ⅰ－５　調査最終面地形図
・遺構位置図 ……10

Ⅱ　調査の方法

図Ⅱ－１　調査範囲と周辺の地形 ……12
図Ⅱ－２　グリッド設定図 ……13
図Ⅱ－３　基本土層柱状図 ……15
図Ⅱ－４　土層断面観察位置図 ……16
図Ⅱ－５　三次郎川左岸遺跡
土層断面図(1) ……17
図Ⅱ－６　三次郎川左岸遺跡
土層断面図(2) ……18
図Ⅱ－７　三次郎川左岸遺跡
土層断面図(3) ……19
図Ⅱ－８　石倉５遺跡土層断面図(1) ……20
図Ⅱ－９　石倉５遺跡土層断面図(2) ……21
図Ⅱ－10　石倉４遺跡土層断面図(1) ……22
図Ⅱ－11　石倉４遺跡土層断面図(2) ……23

Ⅲ　三次郎川左岸遺跡

図Ⅲ－１　遺構位置図、P－１、F－１ ……27
図Ⅲ－２　包含層出土土器分布図 ……29
図Ⅲ－３　包含層出土の土器(1) ……30
図Ⅲ－４　包含層出土の土器(2) ……31
図Ⅲ－５　包含層出土の土器(3) ……32
図Ⅲ－６　包含層出土石器分布図 ……35
図Ⅲ－７　包含層出土の石器 ……36

Ⅳ　石倉５遺跡

図Ⅳ－１　遺構位置図、P－１・２ ……38
図Ⅳ－２　包含層出土土器分布図(1) ……39
図Ⅳ－３　包含層出土土器分布図(2) ……40
図Ⅳ－４　包含層出土の土器 ……40
図Ⅳ－５　包含層出土石器分布図 ……42
図Ⅳ－６　包含層出土の石器(1) ……43
図Ⅳ－７　包含層出土の石器(2) ……44

Ⅴ　石倉４遺跡

図Ⅴ－１　遺構位置図、F－１ ……45
図Ⅴ－２　包含層出土土器分布図(1) ……46
図Ⅴ－３　包含層出土土器分布図(2) ……47
図Ⅴ－４　包含層出土の土器 ……57
図Ⅴ－５　包含層出土石器分布図 ……49
図Ⅴ－６　包含層出土の石器 ……50

表　目　次

Ⅰ　調査の概要

表Ⅰ－１　周辺の遺跡一覧 …… 7
表Ⅰ－２　遺跡別検出遺構一覧 …… 8
表Ⅰ－３　遺跡別出土遺物一覧 …… 8

Ⅱ　調査の方法

表Ⅱ－１　基本層序属性一覧 ……17

Ⅲ　三次郎川左岸遺跡

表Ⅲ－１　層位別出土遺物一覧 ……28
表Ⅲ－２　掲載土器一覧 ……33
表Ⅲ－３　掲載石器一覧 ……35

Ⅳ　石倉５遺跡

表Ⅳ－１　層位別出土遺物一覧 ……39
表Ⅳ－２　掲載土器一覧 ……41
表Ⅳ－３　掲載石器一覧 ……44

Ⅴ　石倉４遺跡

表Ⅴ－１　層位別出土遺物一覧 ……46
表Ⅴ－２　掲載土器一覧 ……48
表Ⅴ－３　掲載石器一覧 ……49

写真図版目次

口絵１
三次郎川左岸遺跡　遺跡周辺遠景
基本土層
口絵２
三次郎川左岸遺跡　Ｑラインメインセクション
三次郎川左岸遺跡　Ｐ－１セクション
三次郎川左岸遺跡　Ｆ－１セクション
三次郎川左岸遺跡　完掘状況
口絵３
石倉５遺跡　表土除去後状況
石倉５遺跡　包含層調査状況
石倉５遺跡　Ｐ－１セクション
石倉５遺跡　Ｐ－２セクション
口絵４
石倉４遺跡　包含層調査状況
石倉４遺跡　71ラインメインセクション
石倉４遺跡　遺物出土状況
石倉４遺跡　Ｆ－１セクション
口絵５
復元土器集合
三次郎川左岸遺跡
図版１
平成15年度　包含層調査状況(1)
平成15年度　包含層調査状況(2)
Ｐ－１遺物出土状況
Ｐ－１完掘状況
図版２
平成15年度　完掘状況
平成15年度　完掘状況遠景
平成16年度　表土除去後状況
平成16年度　包含層調査状況
平成16年度　完掘状況
石倉５遺跡
図版３
表土除去後状況
包含層調査状況
遺物出土状況
Ｐ－１完掘状況
図版４
包含層調査状況
Ｐ－２セクション
Ｐ－２完掘状況
完掘状況
石倉４遺跡
図版５
表土除去後状況
包含層調査状況
石鏃（図Ⅴ－６－３）出土状況
つまみ付きナイフ（図Ⅴ－６－９）出土状況
図版６
包含層調査状況
石斧（図Ⅴ－６－10）出土状況
地形測量状況
完掘状況
遺物など
図版７
三次郎川左岸遺跡　遺構出土の土器
三次郎川左岸遺跡　包含層出土の土器(1)
図版８
三次郎川左岸遺跡　包含層出土の土器(2)
図版９
三次郎川左岸遺跡　包含層出土の土器(3)
図版10
三次郎川左岸遺跡　包含層出土の石器
石倉５遺跡　包含層出土の土器
図版11
石倉５遺跡　包含層出土の石器
石倉４遺跡　包含層出土の土器
図版12
石倉４遺跡　包含層出土の石器
石倉付近のヒグマの足跡
ヒグマが滑り落ちた跡

Ⅰ　調査の概要

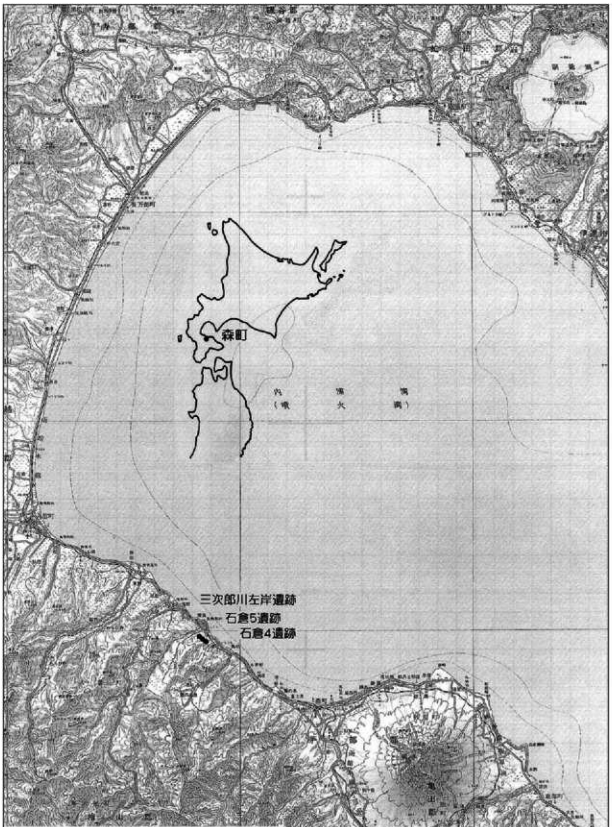
1　調査要項

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
受 託 者：財団法人北海道埋蔵文化財センター
調査期間：平成16年４月１日～平成17年３月31日
遺 跡 名：三次郎川左岸遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－15－38）
所 在 地：茅部郡森町字石倉町610番地24
調査面積：1,420m²（現地調査　平成15年７月14日～10月28日）
　　65m²（現地調査　平成16年10月13日～10月27日）
遺 跡 名：石倉５遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－15－36）
所 在 地：茅部郡森町字石倉町512，513，519番地
調査面積：1,070m²（現地調査　平成16年５月６日～６月30日）
遺 跡 名：石倉４遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－15－34）
所 在 地：茅部郡森町字石倉町482,483,490番地
調査面積：1,852m²（現地調査　平成16年５月６日～６月30日）

2　調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター
（平成15年度）
理事長　森重楯一　　専務理事　宮崎　勝　　総務部長　下村一久
常務理事兼第１調査部長　畑　宏明
第２調査部長　　西田　茂
　第３調査課　課長　熊谷仁志（三次郎川左岸遺跡発掘担当者）
　　主査　鎌田　望（三次郎川左岸遺跡発掘担当者）
　　主任　田中哲郎（三次郎川左岸遺跡発掘担当者）
　　主任　新家水奈
　　主任　大泰司統

（平成16年度）
理事長　森重楯一　　専務理事　宮崎　勝　　常務理事　佐藤俊和　　総務部長　佐藤英一
第２調査部長　　西田　茂
　第４調査課　課長　工藤研治（石倉４遺跡、石倉５遺跡、三次郎川左岸遺跡発掘担当者）
　　主査　鎌田　望（石倉４遺跡、石倉５遺跡、三次郎川左岸遺跡発掘担当者）
　　主査　村田　大
　　主任　新家水奈（石倉４遺跡、石倉５遺跡、三次郎川左岸遺跡発掘担当者）
　　主任　影浦　覚
　　主任　柳瀬由佳



この図は国土地理院発行20万分の1地形図「室蘭」(NK－54－21、平成5年2月1日発行)を複製・加筆したものである。

図Ⅰ－1　森町の位置と遺跡の位置

3　調査にいたる経緯

北海道縦貫自動車道路は、函館市を基点として苫小牧・札幌・旭川の各市を経由して名寄市に至る総延長488km の自動車専用道路である。このうち、長万部町国縫 IC～和寒町和寒 IC 間359km は既に供用されている。七飯～長万部間の路線については、平成５年11月から建設工事が進められている。

平成２年４月、日本道路公団札幌建設局（現：日本道路公団北海道支社）から北海道教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについての事前協議書が提出された。北海道教育委員会は平成２年４月と平成７年11月に所在確認調査を行い、平成５年からはこの路線の北側の長万部町から試掘調査を開始した。また、平成７年10月からは順次、範囲確認調査が実施されている。七飯～長万部間の発掘調査の一部については、財団法人北海道埋蔵文化財センターが委託を受け、平成10年度から行なっている。平成11年度には長万部町の調査を終了した。八雲町の遺跡の調査は平成13年度に終了した。平成13年度からは森町の遺跡の調査を行なっている。

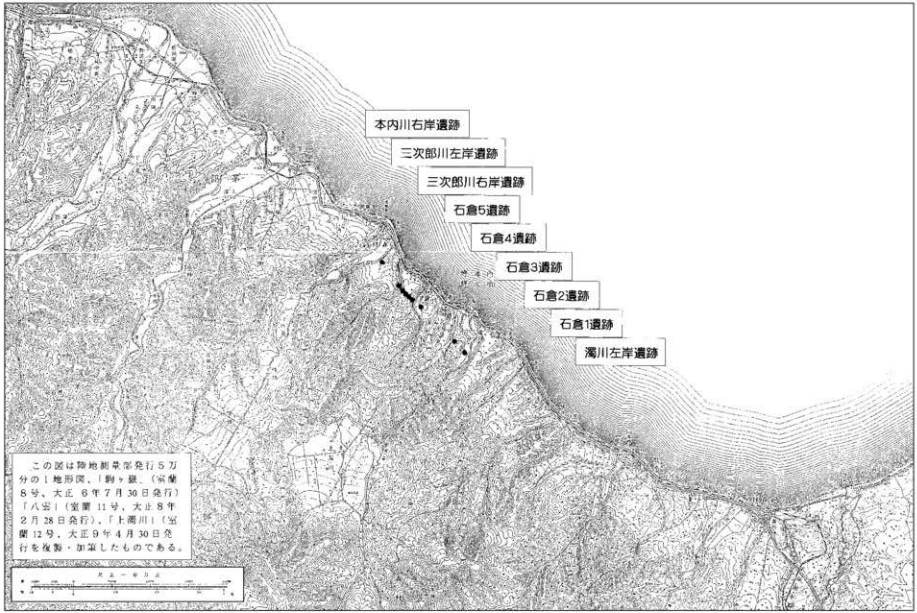
石倉４遺跡は平成２年４月の所在確認調査により遺跡であることが判明し、平成14年８月に試掘調査、10月に再試掘調査が行なわれた。石倉５遺跡は平成２年４月に所在確認調査、平成15年６月に試掘調査が行なわれた。三次郎川左岸遺跡は平成２年４月に所在確認調査、平成15年６月に試掘調査が行なわれた。これらの調査に基づき、平成15年度には石倉５遺跡（962m^2）と三次郎川左岸遺跡（1,420m^2）、平成16年度には石倉４遺跡（1,852m^2）、石倉５遺跡（1,070m^2）、三次郎川左岸遺跡（65m^2）の発掘調査を行なった。このうち、平成15年度に発掘調査を行なった石倉５遺跡の962m^{2}については、平成16年３月に報告済である。

4　遺跡の位置と環境

森町は北海道西南部、渡島半島の中ほどの海沿いに位置する。行政区画上は渡島支庁管内茅部郡に属し、西は茂無部川を境に八雲町、南西は渡島山地を分水嶺として厚沢部町・大野町、南は宿野辺川を境に七飯町、東は駒ヶ岳山頂から押出沢川を境に砂原町と接し、噴火湾に北面する。遺跡は森町市街地より北西約７～12km の字石倉町にある。字石倉町は北東が海、南西には山が迫る地勢で、茂無部川、本内川、三次郎川（山野川）、石倉川、石川の沢川、濁川など噴火湾に注ぐ河川がある。これらに面した河岸段丘上や海岸段丘上の平坦面には、平成16年12月現在で10か所の遺跡が確認されている。

三次郎川左岸遺跡は海岸から200m内陸、三次郎川左岸の河岸段丘上の標高35～50mに立地する。三次郎川を挟んで対岸には三次郎川右岸遺跡があり、その上の段丘上の標高55～60mには石倉５遺跡、その東南100mの標高約60mには石倉４遺跡が立地する。ともに海岸から250mほど内陸にある。さらに、東南400mの石倉川左岸の海岸段丘上の標高65～75mには石倉３遺跡がある（図Ⅰ－２・３）。

石倉の元の地名は「シュウンナイ」という。アイヌ語の「ショ」（滝・裸岩）「ウン」（…のある所）「ナイ」（川・沢）、「滝のある沢」の意である。現在の本石倉（ほんいしくら）にそそぐ小川から得た名という（森町編　1980）。これがどのような経緯で「石倉」となったのかは不明であるが、天明４（1784）年の『北藩紀略』には「イシクラ」、寛政３（1791）年の菅江真澄の「えぞのてぶり」には「石倉」という地名が登場している（竹内編　1987）。安政３（1856）年の記述である『竹四郎廻浦日記　巻の三十』には「石クラ」として「…此処も文化頃人家七軒有し由なるが当時四軒、人別三十二人有。…」との記述があり（松浦著・高倉編　1978）、『渡島日誌　巻の四』には同様の記述に苛斂誅求により人口が減ったとの解説が加えられている（松浦著・秋葉解読　1988）。　（鎌田　望）



図Ⅰ－2　遺跡周辺の旧地形図

5　周辺の遺跡

森町では平成16年12月現在、41か所の遺跡が登載されている。これらの多くは茂無部川から森町市街地にかけての海岸段丘上と、噴火湾に注ぐ河川流域に集中している。高速道路の建設に先立って調査された茂無部川から濁川までの地域に所在する遺跡のうち、本書で報告するものを除く６か所についての概要を北から順に述べる（図Ⅰ－１～３、表Ⅰ－１）。

本内川右岸遺跡　平成14年度に調査を行なった縄文時代中・後期の遺跡である。遺構は中期の土壙３基を検出した。遺物は中期の円筒土器上層ｂ式、ノダップⅡ式、後期初頭の天祐寺式土器をはじめ、石鏃、ポイントナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Ｒフレイク、Ｕフレイク、フレイク、石斧、すり石、たたき石、石錘、砥石、石皿・台石、礫・礫片、原石、軽石など892点が出土した。

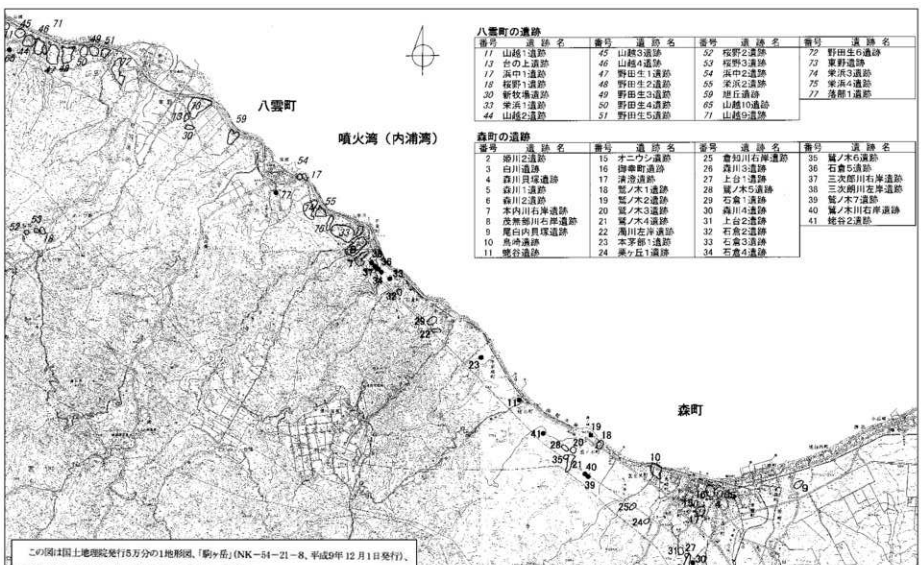
三次郎川右岸遺跡　平成15・16年度に調査を行なった遺跡で、縄文時代中期後半～後期前葉を主体とする。住居跡19軒、配石遺構２か所、土坑82基、焼土16か所を検出した。住居跡には埋甕をもつものや掘り込みの浅いものがある。土壙はフラスコ状や大型礫を伴うもの、掘り込みの浅いものなど多様なものがある。焼土は続縄文時代のものが多く、焼骨片が大量に混じるものがある。縄文時代中期のノダップⅡ式、後期前葉の天祐寺式、涌元式、続縄文時代の恵山式、後北式土器などが出土した。

石倉３遺跡　縄文時代後期初頭を主体とする遺跡である。東南方向に駒ヶ岳を望む最も標高の高い部分で、縄文時代後期初頭の配石を伴う土坑１基を検出した。配石は３つのまとまりが認められ、重さ10～30kgの大礫と径0.5～５㎝程の細～小礫からなる。いずれも安山岩が主体である。礫の下には直径１ｍほどの土壙が検出された。また、緩斜面西側ではＴピットを１基検出した。遺物は、縄文時代後期初頭の天祐寺式、前葉の涌元式やトリサキ式土器をはじめ、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Ｕフレイク、フレイク、石核、石斧、すり石、たたき石、扁平打製石器、メノウ原石、礫など20,221点が出土した。調査範囲のほぼ全面に径５～10㎝程の中礫が分布していた。

石倉２遺跡　縄文時代中期後半を主体とする急峻な尾根上の竪穴住居群である。住居跡11軒、土壙９基、Ｔピット10基、焼土２か所、土器集中４か所、フレイク集中２か所、礫集中１か所を検出した。遺物は縄文時代中期後半の榎林式、晩期後葉の聖山Ⅱ式土器をはじめ、石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、ポイントナイフ、スクレイパー、石斧、ヘラ状石器、扁平打製石器、たたき石、くぼみ石、すり石、石錘、砥石、台石、石皿、Ｒフレイク、フレイク、石核、ミニチュア土器、土器片再生円盤、石棒、石製品、有孔自然礫、礫など16,548点が出土した。

石倉１遺跡　平成14年度から継続調査している縄文時代中・後期を主体とする遺跡である。これまでに住居跡４軒、土坑19基、焼土１か所、集石３か所を検出している。住居跡は縄文時代後期初頭～前葉のものである。15基の土坑のうち２基は墳口部に台石や大型礫をもつ。また、１基はフラスコ状ピットを転用した縄文時代後期前葉の墓である。遺物は縄文時代中期～後期前葉、続縄文時代の土器をはじめ、石鏃、石錐、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石核、石斧、北海道式石冠、すり石、たたき石、扁平打製石器、台石、石皿、石製品など、合わせて約66,000点が出土している。

濁川左岸遺跡　平成13・14・16年度に調査を行なった遺跡で、縄文時代前期後半～後期前葉の集落・墓域である。住居跡25軒、土坑188基、焼土（石組炉を含む）148か所、柱穴様ピット506基、配石遺構１か所、剥片集中１か所を検出した。遺物は約114,000点が出土した。土器では縄文時代後期前葉の天祐寺式、涌元式、トリサキ式、白坂３式などが大部分を占め、前期後半の円筒土器下層式、中期前葉のサイベ沢Ⅶ式併行の土器、続縄文時代の恵山式、後北式などがある。石器では石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、北海道式石冠、扁平打製石器、台石、たたき石などがある。（鎌田）



八雲町の遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
11	山越1遺跡	45	山越3遺跡	52	桜野2遺跡	72	野田生6遺跡
12	台の上遺跡	46	山越4遺跡	53	桜野3遺跡	73	東野遺跡
17	浜中1遺跡	47	野田生1遺跡	54	浜中2遺跡	74	栄浜3遺跡
18	桜野1遺跡	48	野田生2遺跡	55	栄浜2遺跡	75	栄浜4遺跡
30	新牧場遺跡	49	野田生3遺跡	59	坦丘遺跡	77	落部1遺跡
33	栄浜1遺跡	50	野田生4遺跡	65	山越10遺跡		
44	山越2遺跡	51	野田生5遺跡	71	山越9遺跡		

森町の遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
2	姫川2遺跡	15	オニウシ遺跡	25	倉知川右岸遺跡	35	鷲ノ木6遺跡
3	白川遺跡	16	御幸町遺跡	26	森川3遺跡	36	石倉5遺跡
4	森川貝塚遺跡	17	浜浦遺跡	27	上台1遺跡	37	三次郎川右岸遺跡
5	森川1遺跡	18	鷲ノ木1遺跡	28	鷲ノ木5遺跡	38	三次郎川左岸遺跡
6	森川2遺跡	19	鷲ノ木2遺跡	29	石倉1遺跡	39	鷲ノ木7遺跡
7	本内川右岸遺跡	20	鷲ノ木3遺跡	30	森川4遺跡	40	鷲ノ木川右岸遺跡
8	茂無部川右岸遺跡	21	鷲ノ木4遺跡	31	上台2遺跡	41	姥谷2遺跡
9	鷲台内貝塚遺跡	22	鳳川左岸遺跡	32	石倉2遺跡		
10	鳥崎遺跡	23	本茅部1遺跡	33	石倉3遺跡		
11	鷲谷遺跡	24	黒ヶ丘1遺跡	34	石倉4遺跡		

図Ⅰ－3　周辺の遺跡

表Ⅰ－1　周辺の遺跡一覧

＊登載番号の太字（1・12～14）の遺跡は図Ⅰ－3の範囲外になる。

登載番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期（型式略名）	備考
1	船川1	遺物包含地	字駒ヶ岳132－1～4	河岸段丘	167	縄文中期（円筒上層）	
2	船川2	遺物包含地	字駒ヶ岳17－216、－217、－6	河岸段丘	112	縄文中期（円筒上層）	
3	白川	遺物包含地	字白川49－14	河岸段丘	148～50	縄文晩期、擦文	貝塚あり
4	森川貝塚	貝塚	森川町76～79ほか	海岸段丘	13～15	縄文前期、続縄文（恵山）、擦文、中近世	
5	森川1	遺物包含地	森川町69－2ほか	海岸段丘	15～18	縄文前（円筒下層b）・中期、続縄文（恵山）	1982「森川A遺跡」町教委
6	森川2	遺物包含地	字霧谷34－1、35－2	台地	80～100	縄文中～晩期、擦文	2004「森川2遺跡」町教委
7	本内川右岸	遺物包含地	字石倉町610－7・8	台地	40～60	縄文中（円筒上層b、ノダップII）・後期（天祐寺）	2003「森町本内川右岸遺跡」北埋調報182
8	茂無部川右岸	遺物包含地	字石倉町610－2・5	台地	40～60	縄文中～後期	
9	尾白内貝塚	貝塚	字尾白内926、929－1ほか	海岸段丘	10～14	縄文晩期（大洞A'）、続縄文（恵山）	1981「尾白内」,1993「尾白内2」町教委
10	鳥崎	遺物包含地	鳥崎31－1、字富士見町13ほか	海岸段丘	15～30	縄文後期	1975「鳥崎遺跡」町教委
11	蛯谷	遺物包含地	字蛯谷町146－1ほか	河岸段丘	30～32	縄文中（円筒上層）・後期	1971　町教委発掘調査
12	赤井川1	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	175～195	縄文中期（円筒上層）	
13	赤井川2	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	230～235	縄文中期	
14	赤井川3	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	210	縄文中期	
15	オニウシ	集落跡	字上台町326－18	海岸段丘	25～35	縄文早（東釧路Ⅱ）～中期（円筒上層）	1977「森町オニウシ遺跡発掘調査報告書」町教委
16	御幸町	遺物包含地	字御幸町132－2、字清澄3－1ほか	海岸段丘	8～20	縄文中（円筒上層）・後期	1985「御幸町」,1994「御幸町2」町教委
17	清澄	遺物包含地	字清澄27、29－2	海岸段丘	33～39	縄文中期（円筒上層）	
18	鷲ノ木1	遺物包含地	字鷲ノ木145－1ほか	海岸段丘	15～20	縄文中期（円筒上層）	
19	鷲ノ木2	台場跡	字鷲ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	
20	鷲ノ木3	遺物包含地	字鷲ノ木499－2ほか	河岸段丘	40～45	縄文中期（円筒上層）、続縄文（恵山）	
21	鷲ノ木4	遺物包含地	字鷲ノ木506～510	河岸台地	45～50	縄文中（円筒上層）・後期（タンネトウL）、続縄文（恵山）	2001～3町教委発掘調査
22	濁川左岸	集落跡	字石倉町401、446－1、448	河岸段丘	40～50	縄文前（円筒下層）・中（円筒上層）・後期前葉、続縄文	2003「森町濁川左岸遺跡－B地区－」北埋調報190、2004「森町濁川左岸遺跡－A地区－」北埋調報208
23	本茅部1	遺物包含地	字本茅部町205、272～274、294	海岸段丘	80～85	縄文前（円筒下層）・中（円筒上層、見晴町）・晩期（大洞C2）	2003「森町本茅部1遺跡」北埋調報191、2004「森町本茅部1遺跡2」北埋調報199
24	栗ヶ丘1	遺物包含地	字栗ヶ丘38～44	河岸段丘	35～45	縄文中・後期	2004「栗ヶ丘1遺跡」町教委
25	倉知川右岸	集落跡	字栗ヶ丘7、11－1・2	丘陵	75～80	縄文中（円筒上層、サイベ沢II）・後期（トリサキ）	2004「森町倉知川右岸遺跡」北埋調報196
26	森川3	集落跡	字森川町317－1・7	丘陵	100	縄文前・中期、続縄文（恵山）	2002～2004　道埋文発掘調査
27	上台1	遺物包含地	字上台33－1、42－1、364	丘陵	90	縄文前（円筒下層）・中（円筒上層）・後（トリサキ、大津、手稲）・晩期（型山Ⅱ）	2005「森町上台1遺跡」北埋調報217
28	鷲ノ木5	遺物包含地	字鷲ノ木503－1、495－4・5	河岸段丘	70	縄文後期	2003、－04　町教委発掘調査
29	石倉1	遺物包含地	字石倉町395～397、403、404、439	丘陵	30～40	縄文中・後期	2002～2004　道埋文発掘調査
30	森川4	遺物包含地	字森川町317－18	河岸段丘	90	縄文前（円筒下層）・中（円筒上層）・後（トリサキ、手稲）・晩期（型山Ⅱ）	2005「森町森川4遺跡」北埋調報218
31	上台2	集落跡	字上台町326－5	河岸段丘～緩斜面	90～100	縄文早（条痕文）・前（円筒下層）・中（円筒上層）・後（大津）・晩期	2005「森町上台2遺跡」北埋調報216
32	石倉2	集落跡	字石倉町146、623－1・3・4、624－1、306	河岸段丘	60～75	縄文中（榎林）・晩期(型山Ⅱ)	2004「森町石倉2遺跡」北埋調報197
33	石倉3	遺物包含地	字石倉町482、483、490	河岸段丘	65～75	縄文後期（天祐寺、トリサキ）	2004「森町石倉3遺跡・石倉5遺跡」北埋調報203
34	**石倉4**	**遺物包含地**	**字石倉町511、520、521**	**河岸段丘**	**60**	**縄文前（円筒下層）・中期（円筒上層、大安在B）**	**2005「森町三次郎川左岸遺跡・石倉5遺跡2・石倉4遺跡」北埋調報219**
35	鷲ノ木6	遺物包含地	字鷲ノ木505、511	河岸段丘	65～70	縄文後期	
36	**石倉5**	**遺物包含地**	**字石倉町512、513、519**	**河岸段丘**	**55～60**	**縄文前（円筒下層）・後期（トリサキ）、続縄文（恵山）**	**2004「森町石倉3遺跡・石倉5遺跡」北埋調報205、2005「森町三次郎川左岸遺跡・石倉5遺跡2・石倉4遺跡」北埋調報219**
37	三次郎川右岸	遺物包含地	字石倉町513、516	河岸段丘	40～47	縄文前・中・後期、続縄文	
38	**三次郎川左岸**	**遺物包含地**	**字石倉町610－24**	**河岸段丘**	**35～50**	**縄文前（円筒下層）・後期（天祐寺）、続縄文（恵山、後北C2－D）**	**2005「森町三次郎川左岸遺跡・石倉5遺跡2・石倉4遺跡」北埋調報219**
39	鷲ノ木7	遺物包含地	字鷲の木町397－1ほか	尾根	60	縄文	
40	鷲ノ木川右岸	遺物包含地	字鷲の木町396	台地	60	縄文	
41	蛯谷2	遺物包含地	字蛯谷町281	台地	80	縄文	

＊備考欄の町教委は森町教育委員会、道埋文は財北海道埋蔵文化財センター、北埋調報は財北海道埋蔵文化財センター調査報告書を示す。

6　調査の概要

（1）　三次郎川左岸遺跡

平成15年度から継続調査を行なっている。森市街地から11.5km北西、三次郎川の河岸段丘上の標高35～43mにある。平成15年度は海側の1,420m²の調査を行い、平成16年度は山側の280m²の調査を行なう予定であった。今年度その一部を調査した結果、遺構は検出されず遺物も僅かな出土であり、山側には遺物の分布が広がらなかったため、65m²の調査で終了した。平成15・16年度の調査で、土坑１基、焼土１か所を検出した。遺物は縄文時代前期後半の円筒土器下層式、後期初頭の天祐寺式や浦元Ⅰ式に併行する土器、続縄文時代の恵山式、後北式土器をはじめとして、2,028点が出土した。

（2）　石倉５遺跡

平成15年度から継続調査を行なっている。森市街地から11km北西、三次郎川右岸の山地から海岸に迫る標高60mほどの高位段丘上に立地する。平成15年度は山側部分962m²を調査した。平成16年度は海側部分1,070m²の調査を行った。調査範囲は沢地形であり、沢の最深部では高低差４m、幅20m以上となる。北西側は三次郎川に向かって傾斜しており、下の段丘には三次郎川右岸遺跡がある。遺構はⅤ層から掘り込まれた土坑２基を検出した。遺物は縄文時代前期後半の円筒土器下層式、後期前葉のトリサキ式、続縄文時代の恵山式土器をはじめとして土器・石器合わせて743点が出土した。

（3）　石倉４遺跡

石倉５遺跡の南東側に隣接する。調査範囲の1,852m²は工事用道路により分断されており、まず道路の海側部分から調査に着手した。道路切り替えの後、道路より山側部分の調査を行った。遺構はⅢ層で焼土１か所を検出した。遺物は縄文時代前期後半の円筒土器下層式、中期前半の円筒土器上層式、中期後半の大安在Ｂ式など、土器・石器合わせて1,830点が出土した。　（篠田）

表Ⅰ－２　遺跡別検出遺構一覧

遺跡名	土　坑	焼　土
三次郎川左岸	1	1
石倉５	2	
石倉４		1

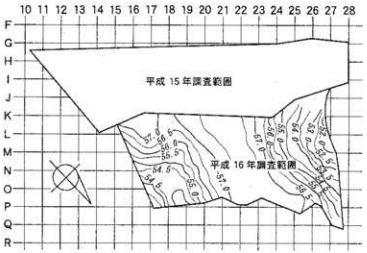
表Ⅰ－３　遺跡別出土遺物一覧

遺跡名＼分類	土器						土器計	石器							
	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳa	Ⅵa	Ⅵb		石鏃	スクレイパー	つまみ付きナイフ	Rフレイク	Uフレイク	石核	フレイク	石斧
三次郎川左岸	19			1716	92	78	1905	1	2			5		52	8
石倉５	278			7	34		319		11		2		4	95	6
石倉４	39	35	131				205	5	3	2	2			23	3

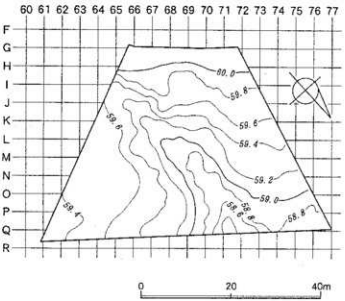
遺跡名＼分類	石器										石器計	土製品	その他	合計
	北海道式石冠	たたき石	打製石器	扁平礫	石錘	石鋸	石皿	台石	原石	礫	有孔礫			
三次郎川左岸		4	1				1		21	25		120	3		2028
石倉５	4	8	3			1		1		282	1	418		6	743
石倉４		1	2	1					2	1581		1625			1830

三次郎川左岸遺跡

石倉５遺跡

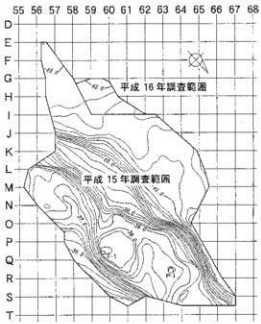


石倉４遺跡

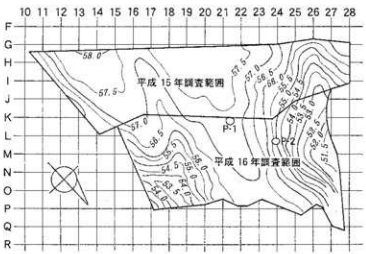


図Ⅰ－４　調査開始面地形図

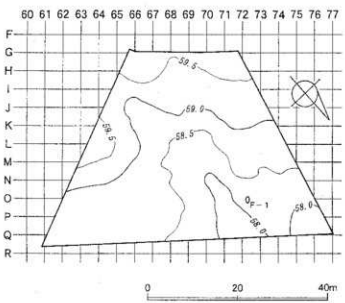
三次郎川左岸遺跡



石倉５遺跡



石倉４遺跡



図Ⅰ－５　調査最終面地形図・遺構位置図

Ⅱ　調査の方法

1　調査区の設定と座標値

調査区（グリッド）の設定

平成15年度の調査の際に、北海道縦貫自動車道工事用地内の基準杭STA.469＋00＝M20とし、STA.470＋00と結んだ線を基準のＭラインとして石倉５遺跡、三次郎川右岸遺跡、三次郎川左岸遺跡に４×４ｍメッシュの区画を用いてグリッドを設定した。区画（グリッド）の名称は、Ｍラインと平行する北西－南東方向ラインにアルファベット、北東－南西方向のラインにアラビア数字を用い、それぞれ交差する地点に調査杭を打設した。南側交点がそのグリッドの名称となる。「H13」のように表記し、アルファベットと数字の間にハイフンは入れずに、遺構名と区別した。

今回新たに、石倉５遺跡の南東側に隣接する石倉４遺跡を調査するにあたり、前年度設定した基準に準拠することにした。ただし、石倉５遺跡の南東方に０のラインがあるため、今年度はそのラインを100として、森市街地に向かうほど数字が減っていくように設定した。なお、これらの遺跡を通る路線は緩やかなカーブを描いているため、石倉４遺跡ではSTA.468＋00、三次郎川左岸遺跡ではSTA.471＋00がＭライン上にはない。アラビア数字で示す直線は真北に対して、42°13′20′東偏する。

座標値

各遺跡の測量杭での、座標第ⅩⅠ系における世界測地系の平面直角座標値（X、Y）、および国土地理院のホームページで公開されている座標変換ソフト（TKY2JGD）(Ver.1.3.79パラメータVer.2.1.1)を用いた座標変換による世界測地系の緯度(B)・経度(L)の計算値は以下の通りである。

（三次郎川左岸遺跡）

M56　X＝－204124.165m　Y＝17749.987m　B＝42°09′43.99235″　L＝140°27′53.30988″

M61　X＝－204110.725m　Y＝17735.176m　B＝42°09′44.42919″　L＝140°27′52.66609″

（石倉５遺跡）

M20　X＝－204220.933m　Y＝17856.625m　B＝42°09′40.84707″　L＝140°27′57.94505″

M25　X＝－204207.493m　Y＝17841.814m　B＝42°09′41.28391″　L＝140°27′57.30127″

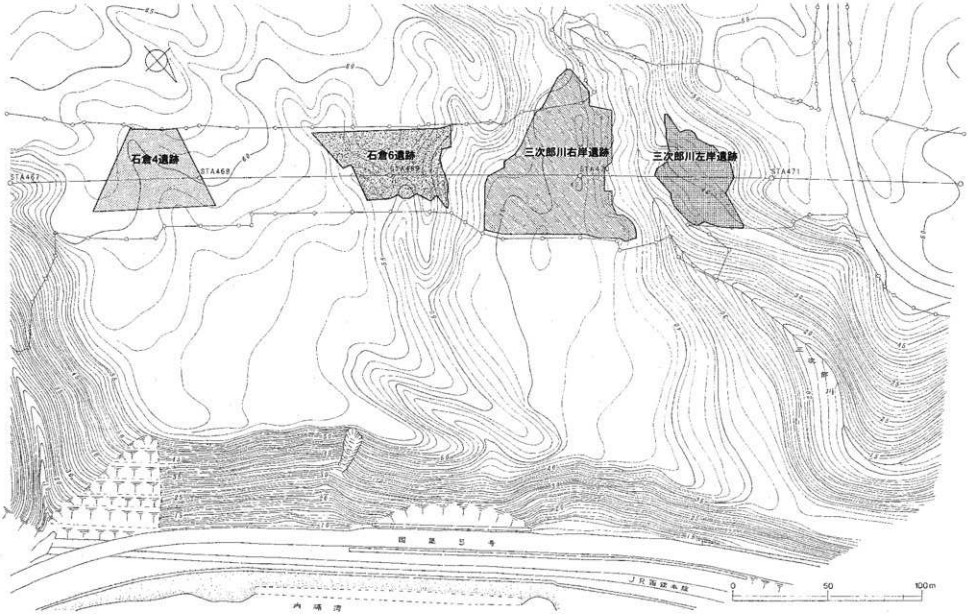
（石倉４遺跡）

M70　X＝－204301.574m　Y＝17945.491m　B＝42°09′38.22593″　L＝140°28′01.80764″

M75　X＝－204288.133m　Y＝17930.680m　B＝42°09′38.66282″　L＝140°28′01.16388″

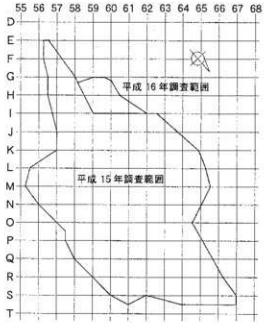
2　発掘調査の方法

三次郎川左岸遺跡では、まず65m²についてⅢ～Ⅵ層を移植ゴテと片手鎌により２㎝ずつ掘り下げ、遺物・遺構の有無を確認して掘り下げていった。Ⅶ層はスコップとジョレンにより除去し、Ⅷ層上面の精査を行なった。石倉５遺跡と石倉４遺跡では、調査範囲全体にわたり適当な間隔を空けて25％調査を行い遺物分布の濃淡を確認して、分布の濃い部分から包含層調査を行なった。Ⅲ～Ⅵ層の各層については、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら移植ゴテと片手鎌により２㎝ずつ掘り下げ、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ２～５㎝の細かい刻み目を入れた後、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返して掘り下げて調査した。落ち込みが確認された土坑や検出した焼土については、半截して土層観察用の面を残して掘り下げ、実測図と写真により記録した。Ⅶ層はスコップとジョレンにより除去し、Ⅷ層上面の精査を行なった。　（鎌田）

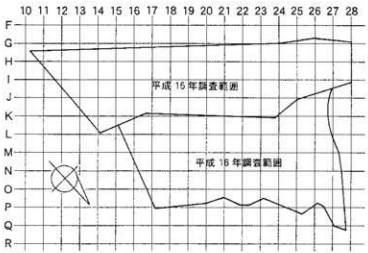


図Ⅱ－1　調査範囲と周辺の地形

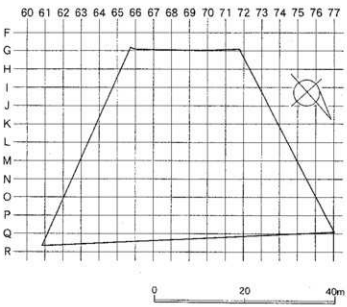
三次郎川左岸遺跡



石倉５遺跡



石倉４遺跡



図Ⅱ－２　グリッド設定図

3　整理の方法

（1）　一次整理

包含層の遺物は位置や層位を記録し、発掘区ごとに取り上げた。遺構の遺物は実測図により位置、層位、標高を記録し、番号を付けて取り上げた。出土状況に応じて、写真や出土状況図など詳細な記録化に努めた。取り上げた遺物は日付順の取り上げ台帳をその場で作成し、その後一次整理もできるだけ現地で行った。遺物の水洗・乾燥後、注記を行ない、遺跡名の略称（三次郎川左岸遺跡ではSS、石倉５遺跡ではIK５、石倉４遺跡ではIK４）、遺構出土のものは遺構名、出土層位、遺物番号を、包含層出土のものは、遺跡名の略称の後にグリッド名＋小グリッド名、出土層位を記入した（包含層出土の場合の例：IK５M20.Ⅳ、遺構出土の場合の例：IK５P－１坑底１）。

現地で分類を行なって遺物分類カードを作成し、日付、層位、点数、分類名、石器は石材等も記入してそれぞれ遺物に添付してビニール袋に収納した。石器の中にはこの時点で重量を含む計測をおこなったものもある。その後遺構出土のものは遺構別、包含層出土のものは分類別に分けて現地でコンテナに仮収納した。10月末の現地調査終了時、江別の当センター作業所に搬送し、再び整理作業を開始した。センターでは取り上げ台帳と分類カードの情報をもとに本台帳作成、集計作業等を進めた。

（2）　二次整理

現地調査終了後は江別市内の整理作業所において、現地での実測図面の整理、遺跡全体図・地形図・遺構図の作成、トレース、出土遺物の再・細分類、遺物台帳と遺物の照合、台帳の補正、集計、表作成、土器・石器の接合・復元作業、報告書掲載遺物の実測、トレース図作成、写真撮影等の報告書作成作業を行なった。

分類後の土器は、遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは、グリッドごとに整理台帳を作成し、点数を集計した。接合にあたっては分類ごとに広げ、同一個体ごとにまとめていった。同一個体の破片のうち一部を抜き出した個体については、バックカーボン複写メモに掲載破片と非掲載破片のグリッド、層位、遺物番号、点数等を記載し、各々に貼付した。

分類後の石器は、遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは分類器種ごとに整理台帳を作成し、点数を集計した。同時に分類と台帳の訂正をおこなった。報告書掲載遺物は、遺構出土、包含層出土を問わず、残存状態が良好であるもの、その器種の特徴を反映しているものを抽出しており、器種ごとの掲載点数はかならずしも出土点数と比例してはいない。石器の計測は「長さ」、「幅」、「厚さ」、「重さ」の項目についておこない、計測値を表に示した。前者３項目は、実測図上で互いに直交する軸の数値を計測した。「長さ」は最大長である。欠損部分があるものは、残存長の数値を（丸括弧）でくくった。「重さ」の数値は剥片石器・100g未満の礫石器・礫については小数点第２位まで計測、100g以上の石器は１gを最小単位とする数値で示した。

（3）　記録類・遺物の収納・保管

調査現場、および整理作業で作成した各種図面、写真フィルム、遺物整理台帳は当面は北海道立埋蔵文化財センターにて保管される。整理作業終了後の遺物は収納台帳とともに森町教育委員会にて保存・活用される。遺物は遺跡ごとに報告書掲載のものと未掲載のものとに分けた。さらに遺構出土のものと包含層出土のものに分け、遺構出土のものは遺構ごとにコンテナに収納した。包含層出土のものは器種分類ごとに分け、さらにグリッドのアルファベット順にコンテナに収納した。これらのコンテナには通し番号をつけ、収納台帳を作成した。

（鎌田）

4　土層の区分

（1）　観察項目と記載順序

三次郎川左岸遺跡の土層観察は田中哲郎が、石倉４遺跡、石倉５遺跡の土層観察は新家水奈が行った。また、土層表記中、土層の混在状態を、基本土層記号などを用いて次の様に表す場合がある。

A＋B：ＡとＢがほぼ同量混じる　　A＞B：ＡにＢが少量混じる

基本層序、遺構の土層の観察には『新版標準土色帖2002年版』（小山・竹原　2002）および『土壌ハンドブック』（ペドロジスト懇談会　1984）を用いた。主な観察項目と記載順序は以下のとおりである。

1．土性区分　砂土(S)、砂壌土(SL)、壌土(L)、シルト質壌土(SIL)、埴壌土(CL)、埴土(C)に分けられる。
2．色　調　色相、明度、彩度を記号および数値で表す方法を採用した（小山・竹原　2002）。
3．粘着性　なし、弱、中、強に分けられる。
4．堅密度　すこぶるしょう、しょう、軟、堅、すこぶる堅、固結に分けられる。
5．下位の層との層界の明瞭性　明瞭、判然、漸変、散漫に分けられる。
6．層界の起伏　平坦、波状、不規則、不連続に分けられる。
7．礫の混入状況　混入面積の割合(%)、石礫の大きさ(細礫0.2～１cm、小礫１～５cm、中礫５～10cm、大礫10～20cm、巨礫20～30cm、巨岩30cm以上)、石礫の形状(角礫、亜角礫、亜円礫、円礫)、石礫の風化の度合い(未風化、半風化、風化、腐朽)、石礫の種類(軽石、堆積岩等)を記入。

（2）　基本層序（図Ⅱ－３～11、表Ⅱ－１）

Ⅰ層：表土・耕作土。

Ⅱ層：駒ヶ岳起源降下火山灰(Ko－d)層。噴出年代は1640年。平均層厚は150cm。

Ⅲ層：黒色土。Ⅱ層(Ko－d)直下の腐植土層。擦文～中・近世の遺物包含層。層厚０～10cm。

Ⅳ層：にぶい黄褐色土。白頭山苫小牧起源降下火山灰(B－Tm)層。噴出年代924～933年、944～947年。層厚０～５cm。

Ⅴ層：黒色土。擦文～続縄文・縄文時代晩～早期の遺物包含層。

Ⅴａ層：Ⅴｂ層よりも黒色度合いが強い。擦文～続縄文時代の遺物包含層。層厚０～10cm。

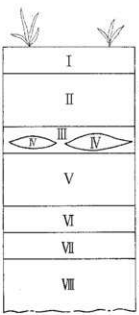
Ⅴｂ層：Ⅴａ層よりもやや明るい。縄文時代の遺物包含層。層厚約20cm。

Ⅵ層：黒褐色土。漸移層。Ko－g粒多く混入。層厚０～20cm。

Ⅶ層：褐～黄褐色土。駒ヶ岳起源降下軽石(Ko－g)層。噴出年代約6000年前。層厚約０～20cm。

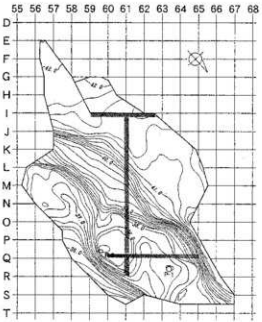
Ⅷ層：にぶい黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層。濁川カルデラ(Ng)起源降下火山灰の風化再堆積（ローム）層。層厚約60～100cm。今回の調査では縄文時代早期の遺物は出土していない。

（新家水奈）

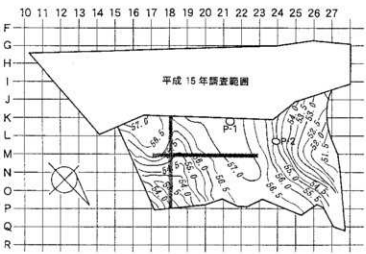


図Ⅱ－３　基本土層柱状図

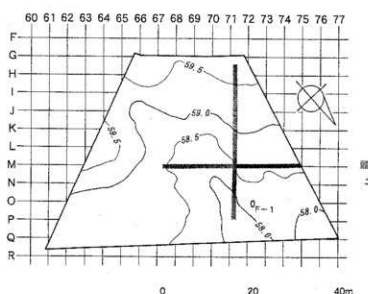
三次郎川左岸遺跡



石倉５遺跡



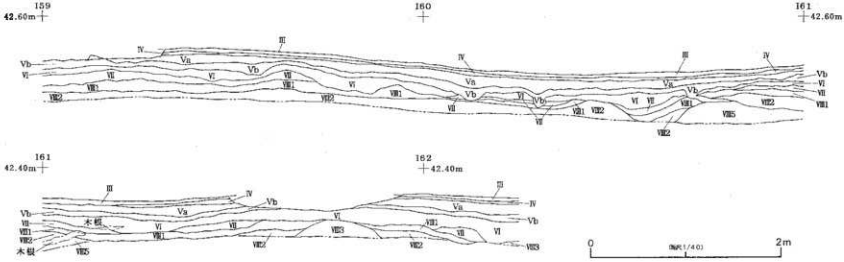
石倉４遺跡



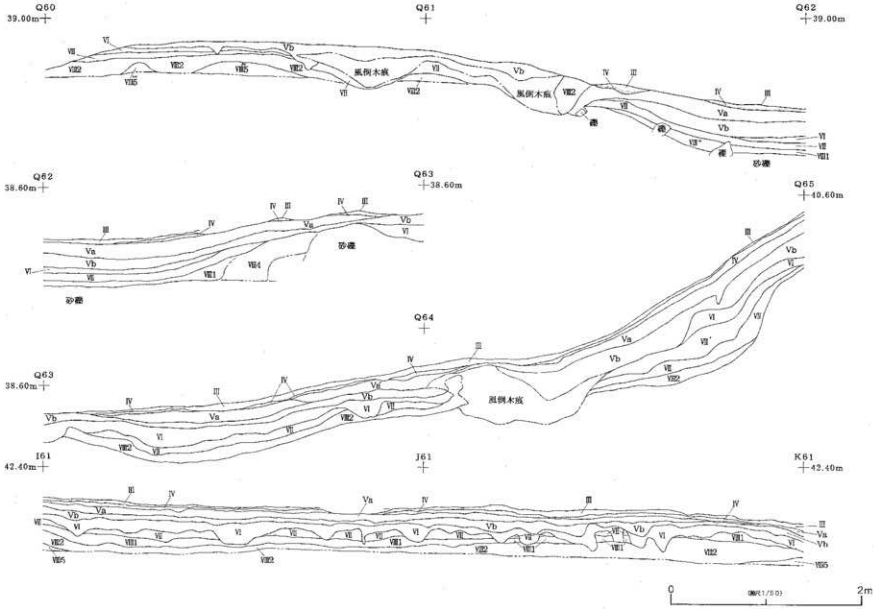
図Ⅱ－４　土層断面観察位置図

表Ⅱ－1　基本層序属性一覧

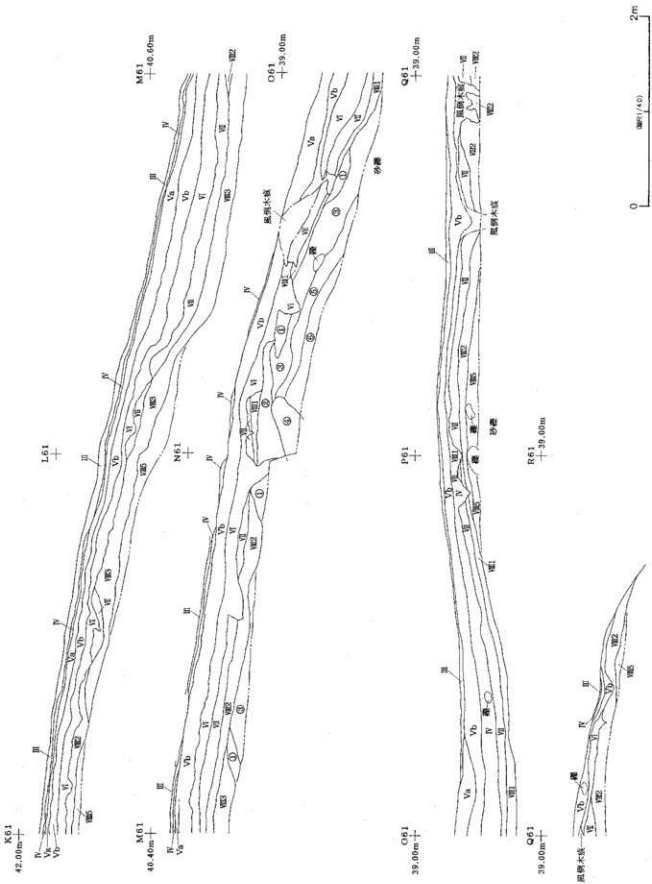
層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の記伏	礫の混入	その他
Ⅰ					表土・耕作土				
Ⅱ	砂土	にぶい黄褐	10YR5/3	無	しょう	明瞭	平坦	100% 細礫 亜角礫 未風化 軽石	駒ヶ岳起源降下火山灰(Ko－d)層
Ⅲ	埴壌土	黒	10YR1.7/1	強	堅	明瞭	不連続	なし	Ⅱ層(Ko－d)直下の腐植土層
Ⅳ	埴壌土	にぶい黄褐	10YR4/3～5/3	中	堅	明瞭	不連続	なし	白頭山苫小牧起源降下火山灰(B－Tm)層
Ⅴa	埴壌土	黒	10YR1.7/1～2/1	強	堅	判然	平坦	なし	遺物包含層
Ⅴb	埴壌土	黒	10YR1.7/1	強	堅	判然	平坦	なし	遺物包含層
Ⅵ	壌土	黒褐	10YR2/3	中	堅	判然	不連続	40% 細礫 亜円礫 半風化 軽石	Ⅴ層と Ⅶ層の漸移層
Ⅶ	砂土	褐～黄褐	10YR4.5/6	無	堅	判然	不連続	100%細礫 亜円礫 半風化 軽石	駒ヶ岳起源降下軽石(Ko－g)層
Ⅶa	埴壌土	にぶい黄褐	10YR4/3	中	すこぶる堅	明瞭	平坦	2％ 細礫 亜角礫 風化 軽石 角閃石 安山岩？	潤川起源降下火山灰の風化再堆積（ローム）層 ≒1～1.5cm の青灰色の火山砂礫・軽石混入
Ⅶb	埴壌土	にぶい黄褐	10YR4/3	中	すこぶる堅	明瞭	平坦	50% 細～小礫 亜角礫 未風化 軽石	潤川カルデラ火砕流堆積物(Ng)
Ⅶ1	粘質土	灰～オリーブ黒	5Y4/1～3/2	強					沢地部分は腐植化目立つ、黒褐～暗褐色土（10YR3/2～3/3）
Ⅶ2	粘質土	灰黄褐～にぶい黄褐	10YR5/2～5/3						漸移的
Ⅶ3	シルト質土	灰オリーブ	5Y6/2						
Ⅶ4	粘土	明黄褐	2.5Y6/6						
Ⅶ5								Ⅶ2層＋軽石粒	
①	粘土	灰白色	5Y7/1						
②	シルト質土	オリーブ褐色	2.5Y4/4						
③	シルト質土	灰オリーブ色	5Y6/2						Ⅶ3に似る
④	砂土	オリーブ褐色	2.5Y4/3						
⑤	粘質土	淡橙～にぶい橙色	5YR8/3～7/3						漸移的
⑥	粘質土	橙色	2.5YR6/8						



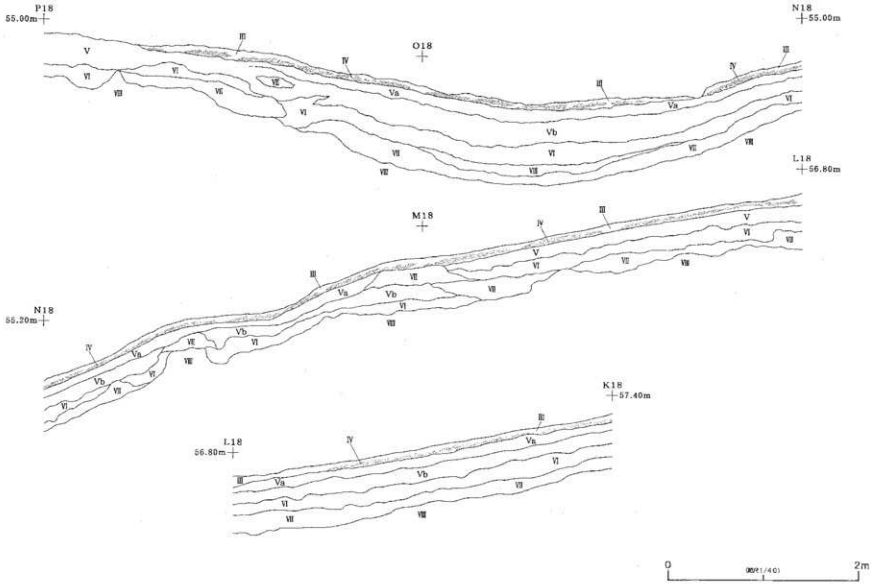
図Ⅱ－5　三次郎川左岸遺跡土層断面図(1)



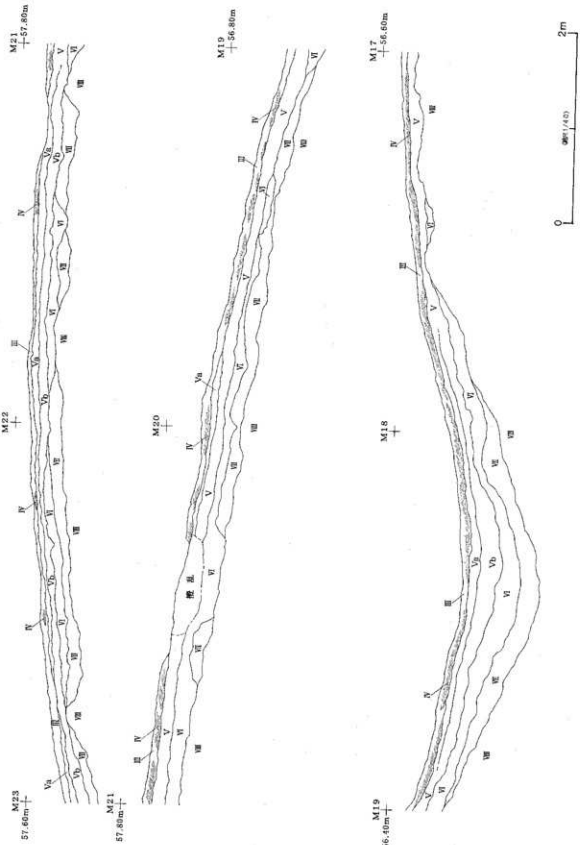
図Ⅱ－6　三次郎川左岸遺跡土層断面図（2）



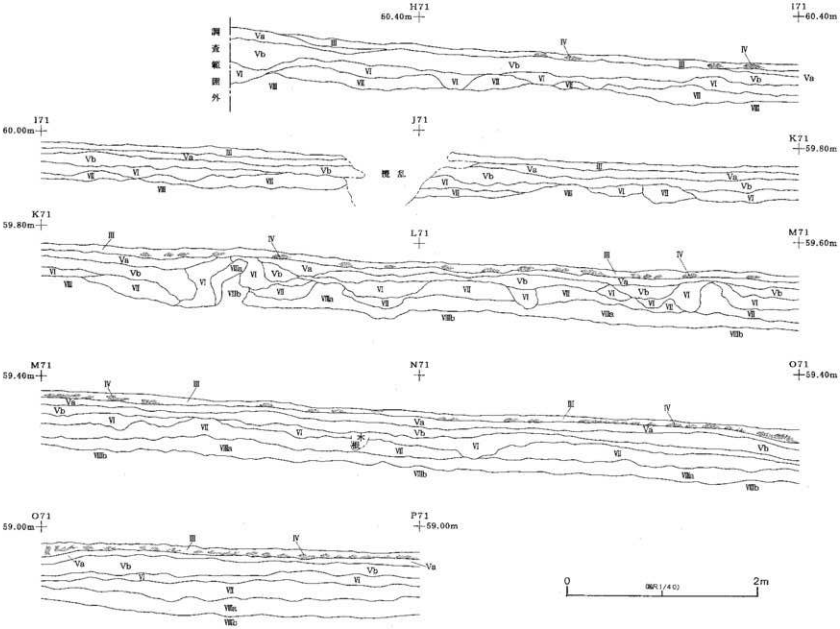
図Ⅱ－7　三次郡川左岸遺跡土層断面図(3)



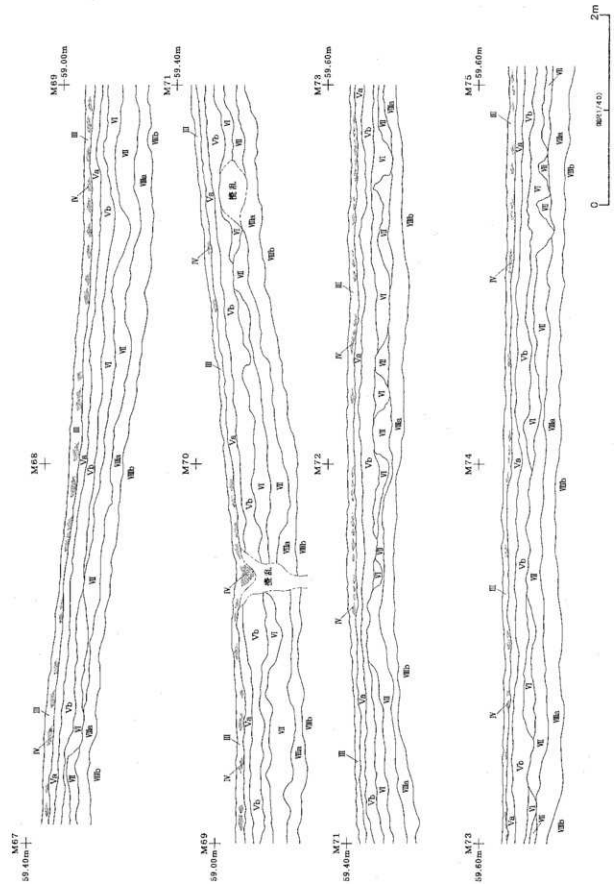
図Ⅱ－8　石倉５遺跡土層断面図（1）



図Ⅱ－９　石倉５遺跡土層断面図(２)



図Ⅱ－10　石倉４遺跡土層断面図（１）



図Ⅱ－11　石倉４遺跡土層断面図(2)

5　遺物の分類

（1）土　器

分類にあたっては、これまでの噴火湾沿岸、渡島半島での調査結果を基にした分類を踏襲した。出土した土器には縄文時代前期後半、中期前半、中期後半、後期初頭、続縄文時代のものがある。

便宜上、縄文時代早期の資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をⅡ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群とした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせて時期差を示した。前半をａ類、後半をｂ類、あるいは前葉をａ類、中葉をｂ類、後葉をｃ類とした。

Ⅰ群　縄文時代早期に属するもの

ａ類：貝殻文、条痕文のある土器群。

ｂ類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などのある土器群。

Ⅱ群　縄文時代前期に属するもの

ａ類：縄文の施された丸底、尖底の土器群。

ｂ類：円筒土器下層式に相当するもの。

Ⅲ群　縄文時代中期に属するもの

ａ類：円筒土器上層式に相当するもの、その系譜を引くもの（サイベ沢Ⅶ式、見晴町式）。

ｂ類：榎林式、大安在Ｂ式、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

Ⅳ群　縄文時代後期に属するもの

ａ類：天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津Ⅶ群、白坂３式、十腰内Ⅰ式に相当するもの。

ｂ類：ウサクマイＣ式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの。

ｃ類：堂林式、三ツ谷式、湯の里３式に相当するもの。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属するもの

ａ類：大洞Ｂ式、上ノ国式に相当するもの。

ｂ類：大洞C1式、大洞C2式に相当するもの。

ｃ類：大洞Ａ式、大洞Ａ'式に相当するもの。

Ⅵ群　続縄文時代に属するもの。

ａ類：恵山式に相当するもの。

ｂ類：後北式に相当するもの。

Ⅶ群　擦文時代に属するもの。

（鎌田）

（2） 石器等

石器の分類にあたっては、下記に示した器種別の分類にとどめ、細分は行っていない。

今回調査した３遺跡から出土した石器には、石鏃、スクレイパー、つまみ付きナイフ、Ｕフレイク、Ｒフレイク、石核、フレイク、石斧、北海道式石冠、たたき石、扁平打製石器、石錘、石鋸、石皿、台石、原石、礫、有孔礫などがある。

出土した石器の分布図は、剥片石器と礫石器に分けて作成した。

石器の石材には、石斧を除く剥片石器には頁岩、メノウが多く使われ、黒曜石を利用したものは少ない。石斧は泥岩製が多く、まれに片岩や砂岩が使われている。礫石器はほとんどが安山岩を使用している。製品ではないが、礫として分類したものには、安山岩のほか、軽石、凝灰岩、砂岩もみられた。

分類に使用した名称、および掲載順は以下の通りである。

剥片石器

石鏃
スクレイパー（原則として片面加工、刃部が周縁の３分の１以上）
つまみ付きナイフ（原則として基部は片面加工であり、「ナイフ」という呼称と矛盾するが慣習的にこの名称を使用した）
Ｒフレイク（加工痕のある剥片）
Ｕフレイク（使用痕のある剥片）
石核
フレイク（剥片・細片）
石斧

礫 石 器

北海道式石冠
たたき石
扁平打製石器
石錘
石鋸
石皿
台石
原石
礫

そ の 他

石製品や自然孔を持つ有孔礫など

（新家）

Ⅲ　三次郎川左岸遺跡

1　概　要

平成15年度から調査を行なった縄文時代後期初頭を主体とする遺跡である。森市街地から11.5km北西、八雲町との町境から１km ほど南側の三次郎川沿いにある。遺跡はその両側にあり、「左岸遺跡」「右岸遺跡」と三次郎川で区分けしている。調査地点は三次郎川の河口から直線距離で200m遡った河岸段丘上の標高35～43mにある。調査範囲は上位・中位・下位の３つの平坦面と斜面から成る。

工事用道路の切り替えのため、平成15年度は海側1,420m²の調査を行なった。平成16年度は山側の280m²の調査を行なう予定であった。今年度、その一部を調査した結果、遺構は検出されず、遺物の出土も僅かであり、さらに山側には遺物の分布が広がらなかったため65m²の調査で終了した。

2　遺　構

平成15年度の調査において、下位の平坦面から土坑１基、焼土１か所を検出した。

Ｐ－１（図Ⅲ－１、口絵１、図版１・７）

位　置　Q63ａ～ｄ　　**規　模**　1.15×1.07／0.87×0.93／0.45m　　**平面形態**　円形

立　地　下位の平坦面南側に位置する。東側は三次郎川に下る急斜面となっている。

調査・確認　Ⅶ層調査中に円形の黒色土の落ち込みを検出した。半截して掘り下げたところ、Ⅶ層を底・壁とする立ち上がりを確認した。

覆　土　覆土は７層に分層した。覆土１～３層（覆土上層）は黒色土を主体とする。覆土４～７層（覆土下層）は褐色土を主体とし、黒色土がほとんど入らない土である。いずれも、緻密で堅く締まっている。

遺　物　覆土上層から土器片30点、坑底からたたき石１点と礫１点、土坑脇から礫１点が出土した。１・２は覆土から出土した折り返し口縁とタガ状貼付帯を持つⅣ群ａ類土器である。２は口縁に小突起をもつ。１はＬの縄を巻いた単軸絡条体による網目状撚糸文、２はLR 斜行縄文が施されている。いずれも口縁部は横回転、体部は縦回転で施文され、貼付帯間は無文である。内面はナデ調整、胎土に角閃石・砂・海綿骨針・黄白色軽石を含み、焼成は良好である。流れ込みの遺物と判断される。

時期・性格　覆土下層は埋め戻し土であり、埋め戻した土が窪んだ後に黒色土が発達し流れ込んだものと推定される。腐植土の未発達の時期に掘られた土坑と考えられる。周辺の包含層からⅡ群ｂ類土器が出土していることから、縄文時代前期後半の墓の可能性がある。

Ｆ－１（図Ⅲ－１、口絵２、図版７）

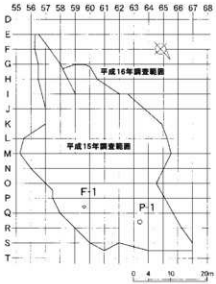
位　置　P60d　　**規　模**　0.98×0.46×0.11m　　**平面形態**　不整形

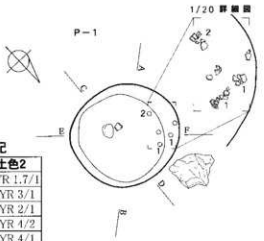
立　地　下位の平坦面北側の窪地に位置する。

調査・確認　風倒木痕の精査の際、凹地に堆積する黒色土の上で検出した。焼土と黒色土との層界は明瞭であり、漸移的な土色変化は見られない。

遺　物　土器片が１点出土した。３はⅣ群ａ類土器である。器面が摩耗して不鮮明であるが、LR 斜行縄文が施されている。内面は磨かれている。胎土には砂・輝石・海綿骨針を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。

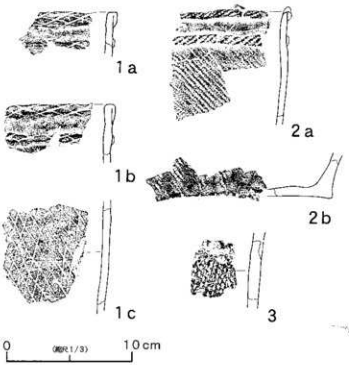
時期・性格　遺物から縄文時代後期初頭のものと推定される。焼土と黒色土との層界は明瞭であり、漸移的な土色変化は見られない。投げ捨てられた焼土と考えられる。　（篠田）

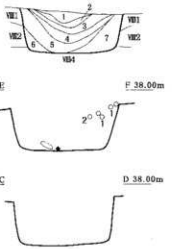


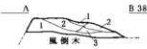


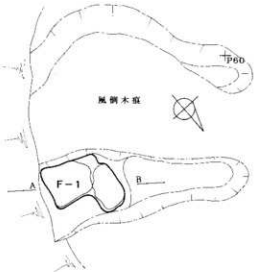
P－1 覆土土層注記

層名	土色1	土色2
1	黒色	10YR 1.7/1
2	黒褐色	10YR 3/1
3	黒色	10YR 2/1
4	灰黄褐色	10YR 4/2
5	褐灰色	10YR 4/1
6	褐色	10YR 4/6
7	灰黄褐色	10YR 4/2









F－1 覆土土層注記

層名	土色1	土色2	その他
1	黒色	7.5YR 1.7/1より赤い	焼土と黒色土の混合土
2	赤～赤橙色	10R 5/8～6/8	堅密度軟
3	暗褐色	7.5YR 3/3	VB層土体

図Ⅲ－1　遺構位置図、P－1、F－1

3　包含層出土の遺物

(1)　土　器

土器は1,874点出土した。時期別の内訳は、縄文時代前期後半の円筒土器下層式土器(Ⅱ群ｂ類)19点、後期初頭の天祐寺式土器や次の段階の涌元Ⅰ式に併行する時期の土器(Ⅳ群ａ類)1,685点、続縄文時代の恵山式土器(Ⅵ群ａ類)92点、後北式土器(Ⅵ群ｂ類)78点である。

包含層出土土器全体に対する各時期の出土点数の割合は、Ⅱ群ｂ類1.01%、Ⅳ群ａ類89.91%、Ⅵ群ａ類4.91%、Ⅵ群ｂ類4.16%である。また、各時期の出土点数に対する各層位ごとの出土点数の割合は、Ⅱ群ｂ類はⅤｂ層73.68%、Ⅲ層10.63%、Ⅵ層10.63%、Ⅳ群ａ類はⅤｂ層65.64%、Ⅴａ層23.68%、Ⅵ群ａ類はⅤｂ層100%、Ⅵ群ｂ類はⅢ層57.69%、Ⅴｂ層34.62%となっている。

Ⅱ群ｂ類は斜面と中位平坦面、Ⅳ群ａ類は中位平坦面と上位平坦面南側、Ⅵ群ａ類は上位平坦面と中位平坦面の間にある斜面、Ⅵ群ｂ類は上位平坦面南側で主に出土した（表Ⅲ－１、図Ⅲ－２）。

縄文時代前期の土器（図Ⅲ－４－５～８、図版８）

５～８はⅡ群ｂ類である。５は口唇がRLの縄を巻いた単軸絡条体により刻まれ、口縁にRLの縄を巻いた単軸絡条体による条線文が施されている。６は多軸絡条体による回転施文をもつ。いずれも内面は磨かれており、胎土に繊維・輝石を含む。６はさらに海綿骨針を含んでいる。７はＲ縄の網目状絡条体、８はＲ縄の単軸絡条体による回転施文をもつ。いずれも内面調整は横ナデで、胎土に白色軽石を含む。さらに、７は繊維と輝石、８は海綿骨針と砂を含んでいる。

縄文時代後期の土器（図Ⅲ－３－１～３、図Ⅲ－４－９～12、図Ⅲ－５－13～25、口絵５、図版７～９）

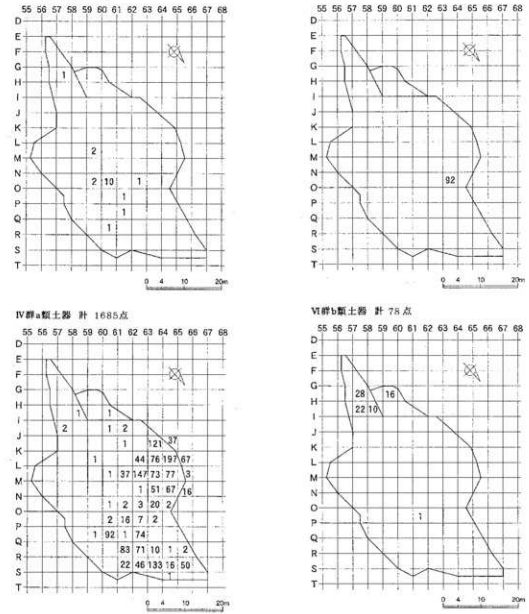
１～３、９～25はⅣ群ａ類である。１～３は復元土器である。１は推定口径19.3cm、現存器高19.3cmを計る、深鉢形土器である。底部を欠いている。折り返し口縁と口縁部のタガ状貼付帯を、垂下する２本一組の貼付で繋いでいる。貼付帯間は無文である。口唇にRLの縄の圧痕、体部にRL縦回転の斜行縄文が施されている。内面調整は横ナデで指頭痕が見られる。胎土に砂・輝石・白色軽石を含む。

表Ⅲ－１　層位別出土遺物一覧

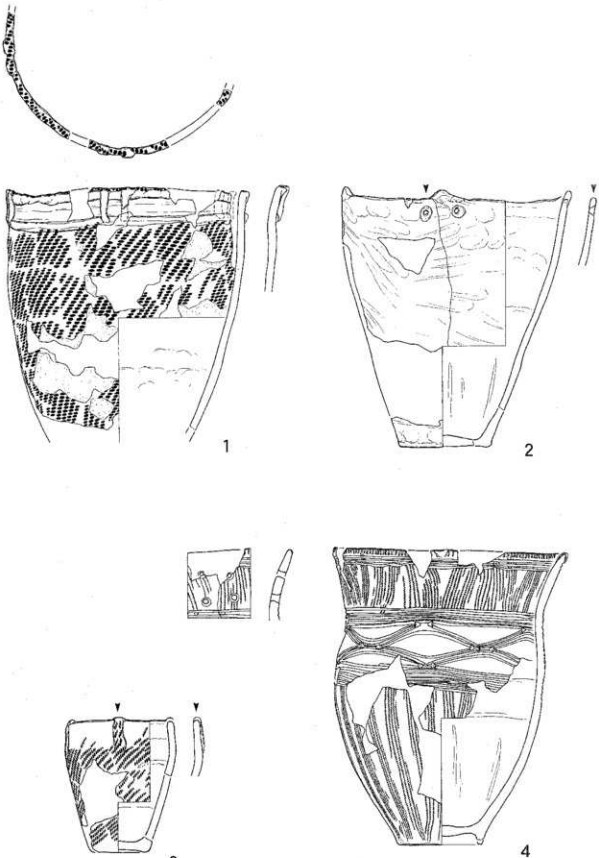
層位 ＼ 分類		土器 Ⅱb	土器 Ⅳa	土器 Ⅵa	土器 Ⅵb	土器計	石器 石鏃	石器 スクレイパー	石器 Uフレイク	石器 フレイク	石器 石斧	石器 たたき石	石器 扁平打製石器	石器 石皿	石器 原石	石器 礫	石器計	土製品	合計
遺構	P－1 覆土		30			30													30
	P－1 坑底											1				1	2		2
	P－1 土坑脳															1	1		1
	P－1 合計		30			30						1				2	3		33
	F－1		1			1													1
	遺構計		31			31						1				2	3		34
包含層	Ⅲ	2	90		45	137				9					1		10		147
	Ⅴa	1	399			400			1	11	1				1	2	16	1	417
	Ⅴb	14	1106	92	27	1239		2	1	23	7	3	1	1	5	17	60	2	1301
	Ⅵ	2	2			4	1		3	3					9	1	17		21
	Ⅶ		1			1									2		2		3
	B　調		54			54				4						3	7		61
	風倒木撹乱 表採・排土等		33		6	39				2					3		5		44
	包含層計	19	1685	92	78	1874	1	2	5	52	8	3	1	1	21	23	117	3	1994
合計		19	1716	92	78	1905	1	2	5	52	8	4	1	1	21	25	120	3	2028

2は口径18.3cm、器高20.5cm、底径7.0cmを計る、深鉢形土器である。口縁に小突起をもつ無文の土器である。器面・内面とも横ナデにより調整され、指頭痕が残る。胎土には砂・輝石・角閃石・白色軽石を含む。3は口径8.5cm、器高10.7cm、推定底径2.4cmを計る、小型の深鉢形土器である。口縁の小突起から垂下する貼付帯と体部にLR斜行縄文が施される。口縁はナデ消されて無文となる。胎土には砂・角閃石・海綿骨針・白色軽石を含む。

9～17は口縁および口縁部を含む個体である。9～13は折り返し口縁とタガ状貼付帯をもつ。9・11は折り返し口縁と口縁部のタガ状貼付帯を垂下する貼付で繋いでいる。10・12は口縁に小突起をもつ。12の小突起は2つ一組である。13は平口縁である。いずれも、貼付帯間はナデ調整されており、口唇・口縁部は横回転、体部は縦回転のLR斜行縄文が施されている。内面調整は9・10・12が丁寧な横ナデ、11・13は横ナデで指頭圧痕が見られる。12の底部は張り出し、底部内面に指頭圧痕が残る。胎土には黄褐色軽石・角閃石・砂を含み、これらに加えて9には輝石、10・13には輝石・細礫、11・



図Ⅲ－2　包含層出土土器分布図



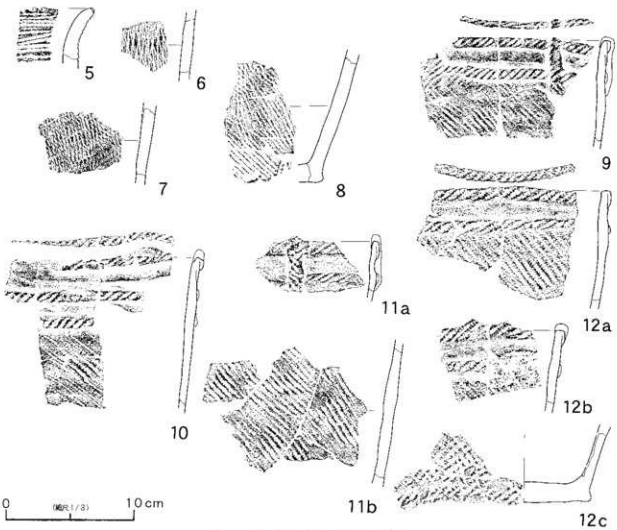
図Ⅲ－3　包含層出土の土器(1)

12には細礫を含む。14は折り返し口縁をもつ。口縁部は横回転、体部は縦回転の LR 斜行縄文が施されている。内面調整は横ナデで、胎土に砂・角閃石・輝石・黄白色軽石を含む。15・16は単軸絡条体の回転施文による網目状撚糸文をもつ。15は折り返し口縁と口縁部のタガ状貼付帯は横回転、体部は縦回転で施文されている。16は口縁に小突起をもち、口縁には縦回転で施文されている。内面調整は15が丁寧な横ナデ、16が横ナデである。いずれも胎土に輝石を含み、それに加えて、15には砂・角閃石、16には黄白色軽石を含む。17は口縁とタガ状貼付帯の間が無文である。口縁部は横回転、体部は縦回転の LR 斜行縄文が施されている。内面は横ナデにより調整され、指頭圧痕がある。胎土には砂・角閃石・黄白色軽石を含む。

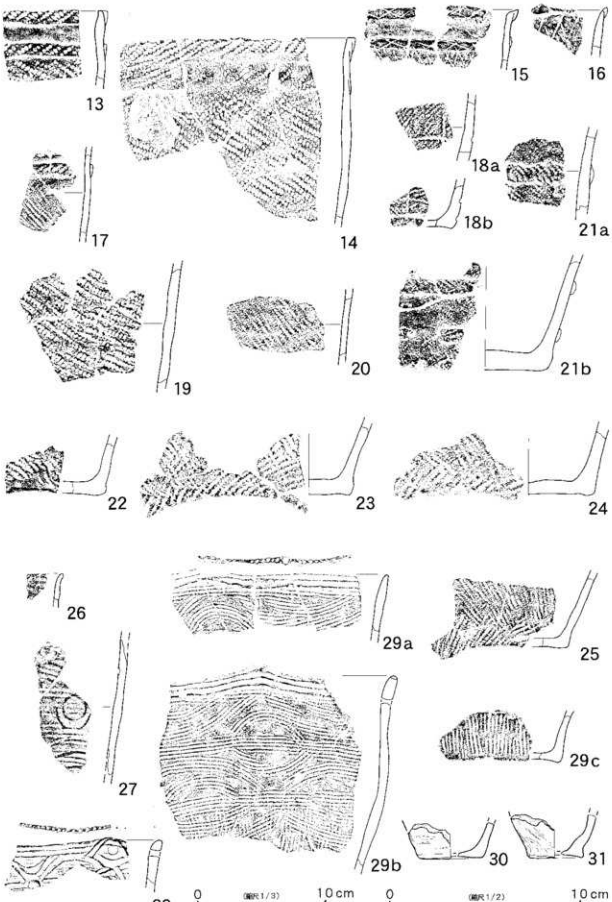
19・20は胴部破片である。地文に縦回転の LR 斜行縄文が施されている。いずれも、内面は丁寧な横ナデにより調整されており、胎土に砂・輝石・角閃石・黄褐色軽石を含む。19はさらに細礫を含む。

18・21～25は底部および底部を含む個体である。18は LR 縄を巻いた単軸絡条体の回転施文の上に同じ施文具による格子状の条線文が施されている。21・24の地文は LR、23は RL の斜行縄文で、23～25には横と縦の回転施文が見られる。18～25は胎土に砂・角閃石・黄白色軽石を含み、さらに19・20・25には輝石、19・21・22・24・25には細礫を含む。

30・31はミニチュア土器である。便宜上ここで記述する。30は推定底径3.3cm、31は推定底径2.9cm



図Ⅲ－4　包含層出土の土器(2)



図Ⅲ－5　包含層出土の土器(3)

を計る。いずれも無文で内面には指頭圧痕が残り、胎土に砂・輝石・白色軽石を含む。

縄文時代の土器（図Ⅲ－３－４、図Ⅲ－５－26～29、図絵５、図版９）

４はⅥ群ａ類である。口径18.6cm、器高23.5cm、底径6.5cmを計る。口唇外縁が刻まれ、口縁４か所に小さな貼付がある。口縁・頸部・胴部が沈線で区画され、口縁部と胴部下半にRLの縞縄文、頸部～胴部上半に菱形に沈線文が描かれる。菱形の頂部には２つ一組の刺突文が施される。内面調整は横ナデで指頭痕が残る。胎土には砂・角閃石・海綿骨針・白色軽石を含む。焼成は良好である。

26～29はⅥ群ｂ類である。26は口縁の無文部分で内面が磨かれている。27は微隆起線、28・29は０段多条RL帯縄文と微隆起線により文様が構成される。29の口唇は刻まれている。いずれも内面調整は横ナデである。27は胎土に白色軽石を含む。28・29は砂・角閃石・黄白色軽石を含む。29はさらに輝石を含む。（鎌田）

表Ⅲ－２　掲載土器一覧

掲載番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	破片数 掲載	破片数 非掲載	破片数 総数	部位	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 粗密	胎土 含有物	非掲載破片の分布状況
1	Ⅳa	P62a	3	Vb	30	11	41	口縁～胴部	口唇RL縄圧痕 貼付文 RL斜行縄文	横ナデ 指頭圧痕	やや粗	砂 輝石 白色軽石	L60c, Vb, P62d, Vb, Q62a•b•d, Vb, R65, B調.
2	Ⅳa	M63c	1	Va	1	1	32	口縁～底部	口縁突起 無文 補修孔	横ナデ 指頭圧痕	やや粗	砂・輝石 角閃石 白色軽石	M64b, 3, Va,
		M63c	3	Vb	3								
		M64b	1	Vb	3								
		M64b	3	Va	1								
		M64b	5	Vb	23								
3	Ⅳa	L64b	1	Ⅲ	1	0	8	口縁～底部	口縁突起 貼付文 LR斜行縄文	横ナデ 指頭圧痕	やや密	砂 輝石 角閃石 白色軽石	
		L64c	1	Vb	2								
		M64a	3	Va	1								
		M64d	1	Vb	1								
		M64d	2	Va	2								
		M64d	3	Ⅲ	1								
4	Ⅵa	N63c	1	Vb	29	17	92	口縁～底部	口縁刻み 沈線文 三角列点 RL縞縄文	横ナデ 指頭圧痕	密	砂 角閃石 海綿骨針 白色軽石	N63c, Vb, N63d, Vb,
		N63d	1	Vb	46								
5	Ⅱb	Q60d	1	Vb	1	0	1	口縁	口唇刻み RL単軸絡条体圧痕	ミガキ	密	繊維・輝石 海綿骨針	
6	Ⅱb	P61c	1	Vb	1	0	1	胴部	多軸絡条体回転施文	ミガキ	密	繊維・輝石	
7	Ⅱb	N59c	1	Ⅵ	1	0	1	胴部	R縄の網目状結状体	横ナデ 指頭圧痕	密	繊維・輝石 白色軽石	
8	Ⅱb	N60b	1	Vb	5	8	13	胴部～底部	R縄の単軸結状体の回転施文 底部張り出す	横ナデ 指頭圧痕	密	海綿骨針 白色軽石 砂	N59c, Ⅵ, N60a•b•c, Vb, N62d•O61d, Vb,
9	Ⅳa	Q63	1	Vb	1	52	56	口縁～胴部	折り返し口縁 タガ状に貼付帯 垂下貼付帯 貼付帯間ナデ LR斜行縄文 口縁部横，胴部縦回転	丁寧な横ナデ	やや粗	黄白色軽石 角閃石 砂 輝石	Q62a, Ⅲ, Q62b, R62a, Va, P62d, Q62a～c, R62a, R63a•d, R64d, Vb, R65, B調.
		R65	1	B調	3								
10	Ⅳa	H58a	1	Vb	1	99	107	口縁～胴部	口縁突起 折り返し口縁 タガ状に貼付帯 貼付帯間ナデ LR斜行縄文	丁寧な横ナデ	やや粗	黄白色軽石 繊維 砂 角閃石 輝石	Q62d, Ⅲ, K64b•c, M64a, Va, K62c, 63c, 64b•c, L64a•d, M63d, M64a•b, M65a, S64a, Vb, M65, B調.
		M63c	3	Vb	4								
		M64b	2	Vb	1								
		M65a	8	Vb	1								
		M65	1	B調	1								
11	Ⅳa	R63d	2	Vb	1	126	133	口縁～胴部	口縁突起 折り返し口縁 タガ状に貼付帯 貼付帯間ナデ 垂下貼付帯 LR斜行縄文 口縁横，胴部縦回転	横ナデ 指頭圧痕	やや粗	砂・角閃石 黄白色軽石 繊維	R62a, Ⅲ, L61c, L62a, Va, L61c, L62a, Q62b, R63d, R64a, Vb,
		R64a	1	Vb	2								
		L61c	3	Vb	2								
		L61d	1	Vb	1								
		L62b	2	Vb	1								

掲載番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	破片数 掲載	破片数 非掲載	破片数 総数	部位	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 粗密	胎土 含有物	非掲載破片の分布状況
12	Ⅲ a	K64b	3	Va	1	186	198	胴部～底部	口縁突起 折り返し口縁 タガ状に貼付帯 貼付帯間ナデ LR 斜行縄文 口縁横，胴部縦回転 底部直立	丁寧な横ナデ 底部に指頭圧痕	やや粗	黄白色軽石 砂・角閃石 雲母	Q61c, Q62a ~d, Ⅲ, J63b, K64a~d, Q62d, R62a, Va., J63b, K63d, K64a ~b, ~d, M63c, M63a ~b, Q62a, Q63a, P60a, P61d, P62b, Q62b, R62a, R63a, Vb., K64a, 本根.
		K64c	1	Va	1								
		K64c	2	Vb	1								
		N63a	1	Vb	1								
		K64d	2	Va	6								
		G61c	2	Ⅲ	1								
		R62a	3	Va	1								
13	Ⅲ a	M63b	2	Vb	1	172	173	口縁	折り返し口縁 タガ状に貼付帯 貼付帯間無文 LR 斜行縄文 口縁横，胴部縦回転	横ナデ 指頭圧痕	密	砂・角閃石 輝石 黄白色軽石 雲母	J63b ~d, K63b, K64a, M62c, M63b, Va., J63b ~ ~d, J64b, K62c, K63b ~~d, K64a ~b ~d, M62c, M63b ~c, N63a, O63a, Vb., Q62 ~~65, 風倒.
14	Ⅲ a	K64a	2	Va	2	2	9	口縁	折り返し口縁 LR 斜行縄文 口縁横，胴部縦回転	横ナデ 指頭圧痕	密	砂・角閃石 輝石 黄白色軽石	J63b, Va., M63d, Vb.
		M63c	1	Va	3								
		M63c	1	Vb	2								
15	Ⅲ a	R65	1	B 調	4	20	24	口縁	折り返し口縁 タガ状に貼付帯 貼付帯間無文 単軸絡条体回転施文 による網目状撚糸文	丁寧な横ナデ	やや粗	砂 輝石 角閃石	R65, B 調.
16	Ⅲ a	K64b	3	Va	1	0	1	口縁	単軸絡条体回転施文 による網目状撚糸文	横ナデ 指頭圧痕	密	輝石 黄白色軽石	
17	Ⅲ a	L63d	1	Vb	4	18	22	口縁部	タガ状に貼付帯 LR 斜行縄文 口縁横，胴部縦回転	横ナデ 指頭圧痕	やや密	砂 角閃石 黄白色軽石	L63d, Vb.
18	Ⅲ a	L63d	1	Vb	1	8	10	胴部	LR 縄の単軸絡条体の 回転施文・条線文	横ナデ	やや密	砂・角閃石 黄白色軽石	K64b, Va., K63c, L63b, Vb.,
		L63d	1	Vb	1			底部					
19	Ⅲ a	L64a	3	Vb	6	88	94	胴部	LR 斜行縄文縦回転	丁寧な横ナデ	やや密	砂・輝石 角閃石 黄白色軽石 雲母	K64c, Va., K62c, K64b, L64a, L65a, M63b, M64b, M65a, Vb.,
20	Ⅲ a	Q61c	1	Vb	3	37	40	胴部	LR 斜行縄文縦回転	丁寧な横ナデ	やや密	砂・角閃石 黄白色軽石 輝石	R61d, Ⅲ, Q61c, Q62a ~b, R63d, Vb., R65, B 調.
21	Ⅲ a	K64c	1	Va	1	24	31	口縁部	タガ状に貼付帯 LR 斜行縄文縦回転	丁寧な横ナデ	やや粗	砂・角閃石 黄白色軽石 雲母	K64a ~b, L63c, Va., K64b, L63b ~~d, M63d, N63a, Vb.,
		L63b	1	Vb	3			底部					
		L63c	3	Vb	3								
22	Ⅲ a	R63a	2	Vb	2	7	9	底部	LR 斜行縄文縦回転	丁寧な横ナデ	やや密	砂・角閃石 黄白色軽石 雲母	R63d, Va., R63a, Vb., R65, B 調.
23	Ⅲ a	M63c	3	Vb	1	27	31	底部	RL 斜行縄文 横回転・縦回転	横ナデ 指頭圧痕	やや粗	砂 角閃石 黄白色軽石	M64b, Va., M63c, M64a ~b, M65a, Vb.,
		M64b	2	Vb	1								
		M64b	3	Va	2								
24	Ⅲ a	J64b	2	Vb	1	99	103	底部	LR 斜行縄文 横回転・縦回転	横ナデ 指頭圧痕	やや粗	砂・角閃石 黄白色軽石 雲母 輝石	J63a, K64a ~b, Va., J63c, J64b, K64a ~b, L63b, P60b, P62a, Vb.,
		L64b	1	Ⅲ	1								
		O62b	1	Ⅲ	1								
		P62a	1	Vb	1								
25	Ⅲ a	L62d	1	風倒	1	89	93	底部	RL 斜行縄文 横回転・縦回転	横ナデ 指頭圧痕	やや粗	砂 黄白色軽石 角閃石 輝石 雲母	Q61c, Ⅲ, K63a, K65b, Va., K63a ~b, L63a ~d, Q62b, Vb., L62d, 風倒.
		L63a	3	Vb	3								
26	Ⅲ b	O61c	1	Vb	1	0	1	口縁	無文	ミガキ	密	白色軽石	
27	Ⅲ b	G59a	1	Ⅲ	3	50	53	胴部	微隆起	横ナデ	密	砂・角閃石 黄白色軽石	G59a, H58a ~b, Ⅲ,
28	Ⅲ b	G57b	2	Vb	1	10	12	口縁	微隆起 0 段多条帯縄文	横ナデ	密	砂・角閃石 黄白色軽石	H58b, Ⅲ, G57b ~c, Vb.,
		H57a	2	撹乱	1								
29	Ⅲ b	G57b	1	Vb	2	28	37	口縁 口縁 底部	口唇刻み 微隆起 0 段多条帯縄文	横ナデ	密	砂 輝石 角閃石 黄白色軽石	G57c, H57a, Ⅲ, G57b ~c ~d, Vb., H57a, 撹乱.
		H57a	2	撹乱	2								
		G57b	1	Vb	3								
		H58b	1	Ⅲ	2								
30	Ⅲ a	K63c	4	Vb	1	0	1	底部	無文	指頭圧痕	やや粗	砂・輝石 白色軽石	
31	Ⅲ a	K64b	7	Vb	1	1	2	底部	無文	指頭圧痕	やや粗	砂・輝石 白色軽石	K64a, Va.,

（2） 石器等

器種ごと、層位ごとの出土点数は表Ⅲ－１に示してある。三次郎川左岸遺跡出土の石器で掲載したものは、石鏃１点、スクレイパー１点、石斧２点、たたき石１点である。

石　鏃（図Ⅲ－７－１、表Ⅲ－３、図版10）

石鏃はⅥ層から１点出土したのみである。１は柳葉形で両面加工されている。片側にだけえぐりが入り、茎部のくびれがある。黒曜石製。石鏃の形や出土層位から、三次郎川左岸遺跡の主体時期である縄文時代後期初頭よりも古いものの可能性がある。

スクレイパー（図Ⅲ－７－２、表Ⅲ－３、図版10）

スクレイパーは２点出土している。２はメノウ製のスクレイパーである。表裏両面の周縁のみが加工されている。磨耗の程度から、刃部として使用されたのは縦長の側縁片側だけと思われる。

石　斧（図Ⅲ－７－３・４、表Ⅲ－３、図版10）

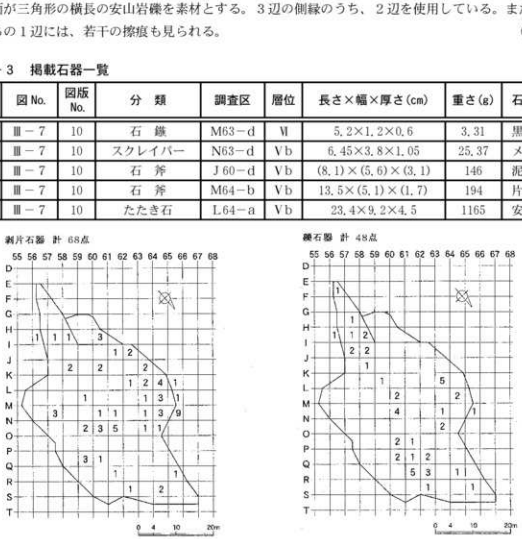
石斧はⅤ層から８点出土している。３は基部を半分以上欠損している。刃部は偏刃である。全面が良く磨かれている。泥岩製である。４は刃部の片角を欠損している。全体を研磨して仕上げてあるが、凹んだ一次調整面が、所々磨かれずに残っている。片岩製である。

たたき石（図Ⅲ－７－５、表Ⅲ－３、図版10）

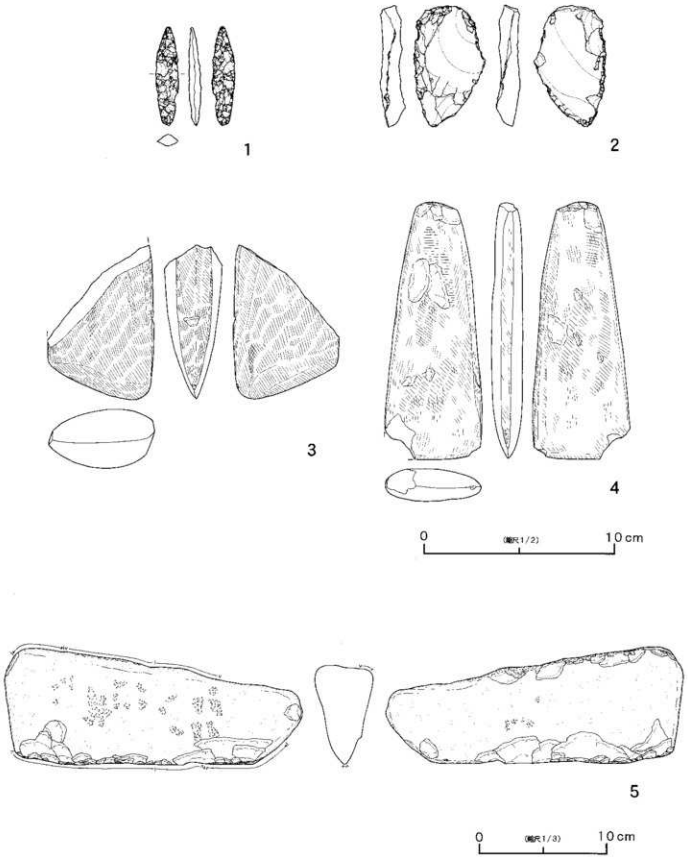
断面が三角形の横長の安山岩礫を素材とする。３辺の側縁のうち、２辺を使用している。また、そのうちの１辺には、若干の擦痕も見られる。　（新家）

表Ⅲ－３　掲載石器一覧

掲載No.	図No.	図版No.	分　類	調査区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石　材
1	Ⅲ－７	10	石　鏃	M63－d	Ⅵ	5.2×1.2×0.6	3.31	黒曜石
2	Ⅲ－７	10	スクレイパー	N63－d	Ⅴb	6.45×3.8×1.05	25.37	メノウ
3	Ⅲ－７	10	石　斧	J60－d	Ⅴb	(8.1)×(5.6)×(3.1)	146	泥　岩
4	Ⅲ－７	10	石　斧	M64－b	Ⅴb	13.5×(5.1)×(1.7)	194	片　岩
5	Ⅲ－７	10	たたき石	L64－a	Ⅴb	23.4×9.2×4.5	1165	安山岩



図Ⅲ－６　包含層出土石器分布図



図Ⅲ－7　包含層出土の石器

Ⅳ　石倉５遺跡

１　概　要

平成15年度から継続調査を行なった、縄文時代前期後半を主体とする遺跡である。森市街地から11km北西、三次郎川右岸の山地から海岸に迫る標高60mほどの高位段丘上に立地する。平成15年度は山側部分962m²を調査した。試掘調査の結果、遺物が希薄なため遺構確認調査を行なったが遺構は検出されなかった。これについては平成16年３月に報告書を刊行済である。平成16年度は海側部分1,070m²の調査を行った。調査範囲は沢地形であり、沢の最深部では高低差４m、幅20m以上となる。北西側は三次郎川に向かって傾斜し、下の段丘には三次郎川右岸遺跡がある。また、南東側には石倉４遺跡がある。　（鎌田）

２　遺　構

遺構は尾根部分で１基、三次郎川に向かって傾斜する斜面で１基、計２基の土坑を検出した。それぞれＰ－１、Ｐ－２と呼称した。土坑が構築された時期は、両者とも伴う遺物が少なく、周辺からの土器の出土も少なかったため、不明である。計測値は、図上で外接する長方形を設定し、これを計測した。「長軸方向」は原則として、長軸が真北から東西どちらに何度ずれているかを計測したものである。平面、断面図とも縮尺は40分の１で掲載した。

Ｐ－１（図Ⅳ－１、口絵３、図版３）

位　置　Ｊ-K21　**規　模**　1.68×1.46／1.30×1.22／0.90m　**平面形態**　楕円形

長軸方向　Ｎ－38°－Ｗ

立　地　平成15年度調査区との境界付近、調査区中央の最も標高の高い尾根上に位置する。尾根幅は約８m、北西側の三次郎川右岸遺跡方向、南東側の石倉４遺跡方向はどちらも急な崖になっている。

確認・調査　包含層Ⅵ層を掘り下げていると、直径約90cmのリング状のⅦ層が混じったローム土と、それに囲まれた黒色土の輪郭が現れた。長軸と思われる方向で半截した。坑底および壁の立ち上がりが明瞭に確認でき、Ⅶ層の掘り上げ土が埋め戻されていることが観察できたので遺構と判断した。

土層・遺物出土状況　覆土は12層に分層した。覆土１層はⅤ層が落ち込んだ自然堆積、それ以外の層は全体にⅦ層が混入しており、人為的に埋め戻されたと思われる。坑底の壁際から長さ64cm、幅43cm、厚さ10cm、重さ34.2kgの台石様の安山岩礫が１点出土した。また、径１cm弱～約10cmの自然礫が坑底から１点、覆土から23点出土している。小礫の石質は、軽石11点、安山岩９点、凝灰岩４点である。これら小礫はいずれも角が摩滅した亜円礫で、接合作業の対象にならないものであった。小礫は流れ込みと考えられる。

時　期　時期を確定できる遺物は、遺構内や周辺から出土していないが、土坑の規模、巨礫を伴う特徴などから、縄文時代後期のものである可能性がある。　（新家）

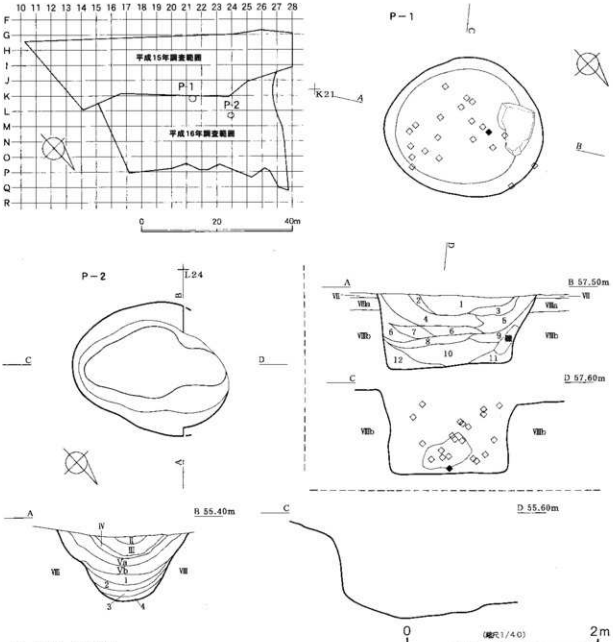
Ｐ－２（図Ⅳ－１、口絵３、図版４）

位　置　L23･24　**規　模**　(1.66)×(1.37)/1.49×0.75/(0.88)　**平面形態**　楕円形

長軸方向　Ｎ－43°－Ｗ

立　地　発掘区北西側の、三次郎川右岸遺跡側に面した急斜面の中腹に位置する。

確認・調査　最終面のⅦ層まで下げた時点で、楕円形の黒褐色土の落ち込みを検出。この段階で既に土坑の斜面下方側約３分の１を掘り過ぎ、上場を確認できないまま掘り下げてしまった。残りの良い、短軸部分で半截し、断面を観察した結果、坑底と壁の立ち上がりを確認し、各層が混ざり合った覆土



P－1 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密性	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	埴壌土	黒色	10YR 1.7/1	中	軟	明瞭	平坦	Ⅴ層主体
2	壌土	暗褐色	10YR 3/3	弱	堅	判然	平坦	Ⅷ層主体
3	埴壌土	暗褐色	10YR 3/3	強	軟	明瞭	波状	Ⅷ層主体
4	埴壌土	にぶい黄褐	10YR 4/3	中	軟	判然	平坦	Ⅷ層主体
5	埴土	黒褐色	10YR 3/2	強	軟	判然	不規則	Ⅶ～Ⅷ層
6	埴土	暗褐色	10YR 3/4	強	軟	判然	不規則	Ⅶ～Ⅷ層
7	埴壌土	にぶい黄褐	10YR 4/3	中	堅	判然	平坦	Ⅷ層主体
8	埴土	褐色	10YR 4/4	強	堅	判然	平坦	Ⅷ層主体
9	埴壌土	暗褐色	10YR 3/3	強	すこぶる堅	判然	平坦	Ⅶ～Ⅷ層
10	埴土	にぶい黄褐	10YR 4/3	強	すこぶる堅	判然	平坦	Ⅷ層主体
11	埴土	暗褐色	10YR 3/3	強	軟	明瞭	平坦	Ⅶ～Ⅷ層
12	埴土	暗褐色	10YR 3/4	強	すこぶる堅	明瞭	平坦	Ⅶ～Ⅷ層

P－2 覆土土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密性	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	壌土	黒褐色	10YR 3/2	中	堅	判然	平坦	Ⅴ＞Ⅷ＞Ⅶ層
2	砂壌土	褐色	10YR 4/4	強	堅	判然	平坦	Ⅷ＋Ⅶ＞Ⅴ層
3	埴壌土	黒褐色	10YR 2/2	強	軟	明瞭	平坦	Ⅴ＞Ⅷ層
4	埴土	にぶい黄褐	10YR 4/3	強	堅	明瞭	平坦	Ⅷ＋Ⅶ層

図Ⅳ－1　遺構位置図、P－1・2

は埋め戻されたものと思われ、遺構と断定した。遺物は出土していない。

覆　土　４層に分層した。Ⅱ～Ⅴb層は自然堆積層がレンズ状に落ち込んだものである。１～４層はこれらの層が混在した層で、人為的に埋め戻されたと考えられる。

時　期　遺物が出土していないため、不明であるが、Ⅴb層の自然堆積が見られるため、石倉５遺跡の主体の時期である、縄文時代前期の土坑の可能性もある。　（新家）

3　包含層出土の遺物

（1）土　器

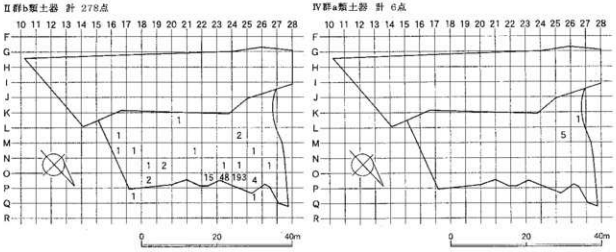
土器は319点出土した。時期別の内訳は、縄文時代前期後半の円筒土器下層式（Ⅱ群ｂ類）278点、後期前葉のトリサキ式（Ⅳ群ａ類）７点、続縄文時代の恵山式土器（Ⅵ群ａ類）34点である。

包含層出土土器全体に対する各時期の土器の出土点数の割合は、Ⅱ群ｂ類87.52%、Ⅳ群ａ類2.19%、Ⅵ群ａ類10.66%となっている。Ⅱ群ｂ類はO22～O24を中心に、Ⅳ群ｂ類はK26・L25、Ⅵ群ａ類はN20で出土した。いずれも、出土層位はⅤb層である（表Ⅳ－１、図Ⅳ－２）。

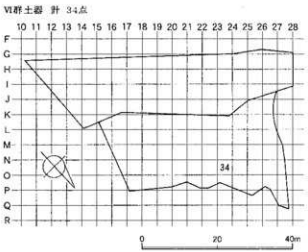
縄文時代前期の土器（図Ⅳ－４－２～11、図版10）

表Ⅳ－１　層位別出土遺物一覧

分類 / 層位	土器			土器計	石器													石器計	陶器片	合計
	Ⅱb	Ⅳa	Ⅵ		スクレイパー	Rフレイク	石核	フレイク	石斧	北海道式石冠	たたき石	磨製石器	扁平打石	石錘	台石	礫	有孔礫			
遺構・覆土																23		23		23
遺構・壊底															1	1		2		2
Ⅲ					1				1							3		5		5
Ⅴa								1								9		10		10
Ⅴb	274	7	34	315	10	2	2	81	5	4	8	3	1			216	1	333		648
Ⅵ							1	2								26		29		29
Ⅶ								1										1		1
Ⅷ							1									1		2		2
風倒木撹乱表採・排土不明	4			4				10								3		13	6	23
合計	278	7	34	319	11	2	4	95	6	4	8	3	1	1	282	1	418	6	743



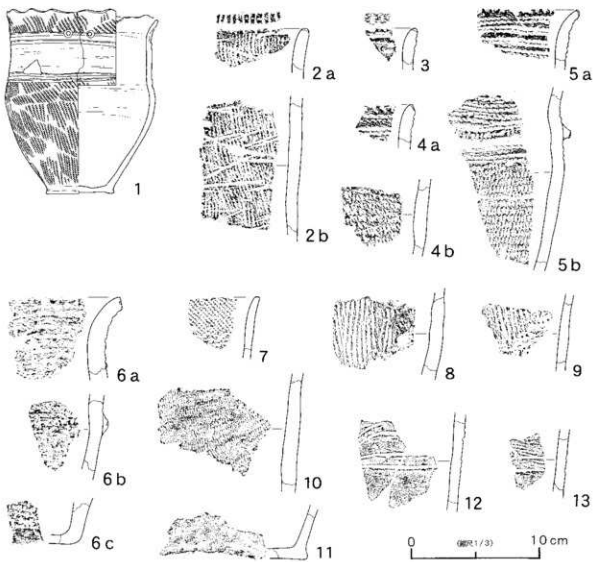
図Ⅳ－２　包含層出土土器分布図（１）



図Ⅳ－3　包含層出土土器分布図(2)

2～11はⅡ群b類である。2～7は口縁および口縁部を含む個体である。2～6は絡条体の回転施文が施されている。

2・3は単軸絡条体による施文が見られる。2は口唇がL縄を巻き付けた単軸絡条体で刻まれている。体部はR縄を巻き付けた単軸絡条体を縦に回転施文した後、L縄による1条と2条の圧痕文が斜位・横位に施されている。内面調整は横ナデで指頭圧痕が見られる。胎土には角閃石・輝石・砂・黄白色軽石を含む。3は口唇が不鮮明であるが単軸絡条体と思われる施文具により刻まれ、口縁にRLの縄による2条単位の条線文がある。胎土はザラメ状を呈し、白色軽石・角閃石・砂を含む。



図Ⅳ－4　包含層出土の土器

表Ⅳ－２　掲載土器一覧

掲載番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	破片数 掲載	破片数 非掲載	破片数 総数	部位	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 粗密	胎土 含有物	非掲載破片の分布状況
1	Ⅵa	N23c	1	Ⅴb	31	3	34	口縁～底部	小波状口縁 沈線文、縞縄文	横ナデ 指頭圧痕	やや密	白色軽石 角閃石・砂	N23c, Ⅴb.
2	Ⅲb	O24d	1	Ⅴb	1	32	35	口縁	口唇単軸絡条体刻み 単軸絡条体回転施文 L 縄圧痕文	横ナデ 指頭圧痕	やや密	角閃石 輝石・砂 黄白色軽石	N26a, Ⅴb. O24b～d, Ⅴb.
		O24c	1	Ⅴb	2			胴部					
3	Ⅲb	O24a	1	Ⅴb	1	0	1	口縁	口唇単軸絡条体刻み RL 縄縄文	ミガキ	粗 ザラメ状	白色軽石 角閃石・砂	
4	Ⅲb	O24a	1	Ⅴb	1	53	55	口縁	口唇刻み、LR 縄を巻いた多軸絡条体の圧痕文・回転施文	ミガキ	密	輝石 繊維 海綿骨針	O23c, Ⅴb. O24a～b, Ⅴb.
		O24c	1	Ⅴb	1			胴部					
5	Ⅲb	O24c	1	Ⅴb	2	4	8	口縁	LR 縄を巻いた多軸絡条体の刻み・圧痕文・回転施文	ミガキ 指頭圧痕	密	繊維 砂 角閃石	K20, Ⅴb. O24c, Ⅴb.
					2			頸部～胴部					
6	Ⅲb	O24b	2	Ⅴb	3	140	145	口縁	半裁竹管押引文 縄縄文 多軸絡条体回転施文	ミガキ	やや密	繊維 砂	O24b, Ⅴb. O25, 風倒.
					1			頸部					
					1			底部					
7	Ⅲb	N19c	1	Ⅴb	1	2	3	口縁	LRL 斜行縄文 綾絡文	ミガキ	やや密	輝石 砂	N18c, Ⅴb. N19a, Ⅴb.
8	Ⅲb	M16a	1	Ⅴb	1	0	1	胴部	単軸絡条体回転施文	横ナデ 指頭圧痕	やや密	白色軽石 輝石・繊維 角閃石	
9	Ⅲb	L16a	1	Ⅴb	1	0	1	胴部	単軸絡条体回転施文	ミガキ	密	繊維・輝石	
10	Ⅲb	O24a	1	Ⅴb	1	2	3	胴部	多軸絡条体回転施文	縦ナデ	密	角閃石 雲母	O24a, Ⅴb.
11	Ⅲb	P25a	1	Ⅴb	1	0	1	底部		ナデ	密	雲母	
12	Ⅳa	L26b	1	Ⅴb	2	3	5	胴部	沈線文	ミガキ	密	輝石・砂 白色軽石	L25a, Ⅴb.
13	Ⅳa	K26b	1	Ⅴb	1	0	1	胴部	沈線文	ミガキ	密	角閃石 白色軽石	

４～６は LR の縄を巻いた多軸絡条体による施文が見られる。４は口唇外縁が刻まれ、口縁に圧痕、体部に縦方向の回転施文をもつ。胎土に輝石・繊維・海綿骨針を含む。５は口縁部に隆帯をもつ。口唇が刻まれ、口縁部に圧痕、体部に縦方向の回転施文をもつ。胎土に繊維・砂・角閃石を含む。６は口唇と隆帯に竹管状工具による右方向からの浅い角度の連続刺突、口縁に条線文、体部に縦方向の回転施文をもつ。胎土に繊維・砂を含む。

７は口縁に LRL 斜行縄文と３条の綾繰文が認められる。LRL の縄にいくつかの結び目を作った原体による横回転施文と思われる。胎土には輝石・砂を含む。３～７の内面調整はミガキである。

８～９は単軸絡条体、10は多軸絡条体による縦方向の回転施文をもつ。内面調整は８が横ナデ、９はミガキ、10は縦ナデである。胎土には、８は白色軽石・輝石・繊維・角閃石、９は胎土に繊維・輝石、10は角閃石・雲母を含む。

11は底部である。底部が張り出し、器面・内面ともナデ調整されている。胎土には雲母を含む。

縄文時代後期の土器（図Ⅳ－４－12・13、図版10）

12・13はⅣ群ａ類である。12は LR 斜行縄文が一部に認められる。調整された器面には幅２㎜の施文具による沈線により弧線・直線が描かれている。13は RL 斜行縄文が施された器面がナデ消され、幅２㎜の施文具による沈線により弧線・直線が描かれている。いずれも内面調整はミガキである。12は胎土に輝石・砂・白色軽石を含む。13は角閃石・白色軽石を含む。

続縄文時代の土器（図Ⅳ－４－１、口絵５、図版10）

１はⅥ群ａ類である。口径11.8㎝、器高14.6㎝、底径5.3㎝を計る深鉢形土器である。小波状口縁をもつ。器面全体に RL 縞縄文を施し、削った頸部に幅２㎜の施文具により２本一組の沈線文が施さ

れている。内面は丹念な横ナデにより調整されるが、指頭圧痕が認められる。胎土には白色軽石・角閃石・砂を含む。口縁部に補修孔がある。（鎌田）

（2） 石器等

器種ごと、層位ごとの出土点数は表Ⅳ－1に示してある。石倉5遺跡出土の石器で掲載したものは、スクレイパー3点、石斧2点、北海道式石冠2点、扁平打製石器2点、石鋸1点である。

スクレイパー（図Ⅳ－6－1～3、表Ⅳ－3、図版11）

スクレイパーは11点出土している。掲載のスクレイパーはいずれも頁岩製である。1は台形様の素材の表面の周縁全体が二次加工され、特に2辺に刃部が作られている。裏面には剥離調整は見られない。2は縦長の素材の背面2辺に二次加工が見られる。刃部は図の左上の側縁部に作出されている。もう片方の側縁には細かな使用痕がある。腹面には二次加工は見られない。腹面のリングの向きに合わせ、打点を上にして掲載したが、左側刃部を垂直に立てるか、あるいは下側にして置いた方が自然と思われる。3は縦長剥片の背面の両側縁に二次加工が見られる。加工は下方先端手前で終わっているので、先端は使用による欠損ではなく、二次加工前からの欠落と考えられる。腹面に加工痕はない。

石　斧（図Ⅳ－6－4・5、表Ⅳ－3、図版11）

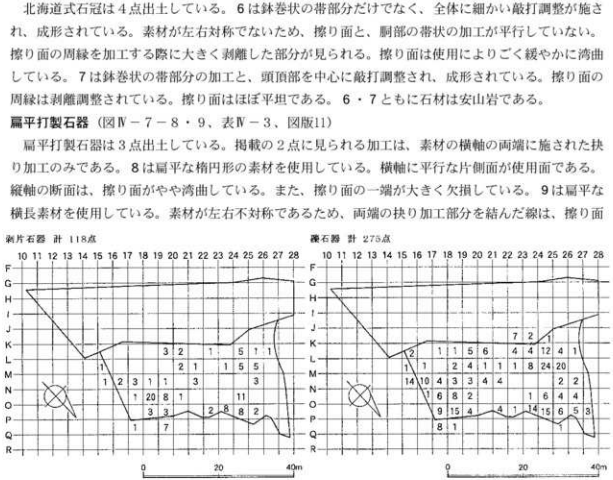
石斧は6点出土している。4は刃部の破片である。偏刃である。部分的に敲打調整痕が残るが、全体に良く研磨され、仕上げられている。泥岩製である。5は刃部の破片である。全体を研磨して仕上げてある。刃部中央に、使用によると思われる剥離欠損がある。砂岩製である。

北海道式石冠（図Ⅳ－6－6・7、表Ⅳ－3、図版11）

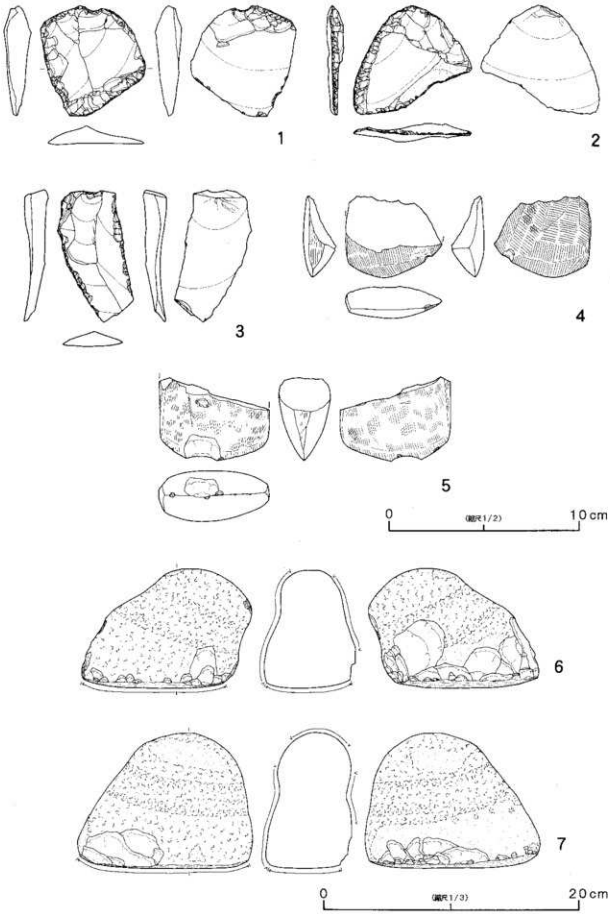
北海道式石冠は4点出土している。6は鉢巻状の帯部分だけでなく、全体に細かい敲打調整が施され、成形されている。素材が左右対称でないため、擦り面と、胴部の帯状の加工が平行していない。擦り面の周縁を加工する際に大きく剥離した部分が見られる。擦り面は使用によりごく緩やかに湾曲している。7は鉢巻状の帯部分の加工と、頭頂部を中心に敲打調整され、成形されている。擦り面の周縁は剥離調整されている。擦り面はほぼ平坦である。6・7ともに石材は安山岩である。

扁平打製石器（図Ⅳ－7－8・9、表Ⅳ－3、図版11）

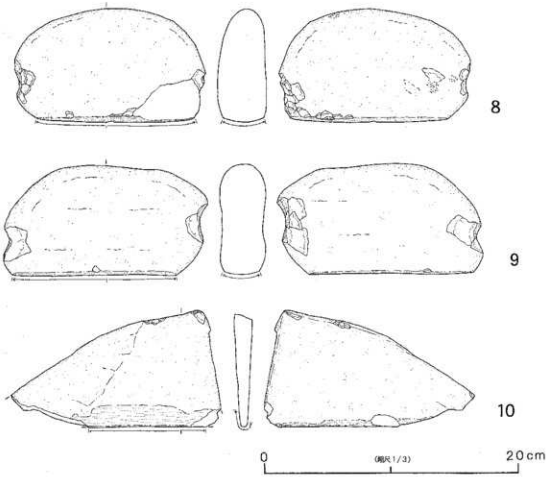
扁平打製石器は3点出土している。掲載の2点に見られる加工は、素材の横軸の両端に施された抉り加工のみである。8は扁平な楕円形の素材を使用している。横軸に平行な片側面が使用面である。縦軸の断面は、擦り面がやや湾曲している。また、擦り面の一端が大きく欠損している。9は扁平な横長素材を使用している。素材が左右不対称であるため、両端の抉り加工部分を結んだ線は、擦り面



図Ⅳ－5　包含層出土石器分布図



図Ⅳ－６　包含層出土の石器（１）



図Ⅳ－7　包含層出土の石器(2)

と平行でなく、横軸から若干ずれている。8・9ともに石材は安山岩である。

石　鋸（図Ⅳ－7－10、表Ⅳ－3、図版11）

石鋸は掲載の1点のみが出土している。素材は厚さ約0.5～1cmの薄い安山岩の破片を使っている。表裏両面とも赤く酸化しており、もともとこの薄さの素材を利用したと思われる。平面が縦長二等辺三角形の素材の、長い1辺が機能部分になっており、表裏で擦り痕の残る幅が異なっている。図の表面、左端は破棄されたのちに欠損したものと思われる。（新家）

表Ⅳ－3　掲載石器一覧

掲載No.	図No.	図版No.	分　類	調査区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石　材
1	Ⅳ－6	11	スクレイパー	M19－b	Ⅴb	5.8×5.5×1.4	29.22	頁　岩
2	Ⅳ－6	11	スクレイパー	L21－c	Ⅴb	6.2×5.7×0.95	20.96	頁　岩
3	Ⅳ－6	11	スクレイパー	O18－d	Ⅴb	(6.9)×4.0×1.05	19.22	頁　岩
4	Ⅳ－6	11	石　斧	M16－d	Ⅴb	(5.0)×(4.2)×(1.7)	37.01	泥　岩
5	Ⅳ－6	11	石　斧	K24－a	Ⅴb	(5.8)×(4.4)×(2.7)	69.98	砂　岩
6	Ⅳ－6	11	北海道式石冠	N19－a	Ⅴb	13.4×9.4×7.2	1070	安山岩
7	Ⅳ－6	11	北海道式石冠	L26－b	Ⅴb	13.8×10.7×6.8	1335	安山岩
8	Ⅳ－7	11	扁平打製石器	O19－c	Ⅴb	15.0×8.9×3.9	752	安山岩
9	Ⅳ－7	11	扁平打製石器	K19－c	Ⅴb	16.1×8.7×3.6	768	安山岩
10	Ⅳ－7	11	石　鋸	L15－c	Ⅴb	16.5×9.1×1.4	246	安山岩

V　石倉４遺跡

1　概　要

石倉５遺跡の南東側に隣接する、縄文時代中期後半を主体とする遺跡である。森市街地より約10km北西、山地から海岸に迫る標高60mほどの高位段丘面に立地する。調査範囲の1,852㎡は工事用道路により分断されており、まず道路の海側部分から調査に着手した。道路切り替えの後、道路より山側部分の調査を行った。　(鎌田)

2　遺　構

調査区Ｎ・O72のⅢ層で焼土を１か所検出した。

Ｆ－１（図Ｖ－１、口絵４）

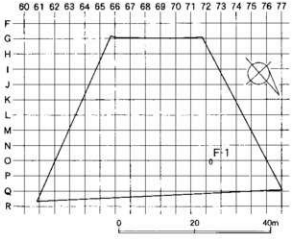
位　置　Ｎ・O72　**規　模**　1.33×0.71×0.06m　**平面形態**　不整形

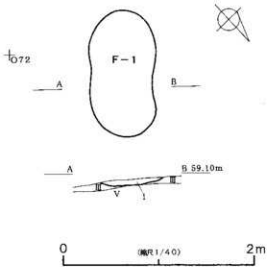
立　地　調査区北側、調査区内の若干標高が低い部分の平地に位置する。

確認・調査　包含層Ⅲ層を調査中、暗赤褐色の土と黒色土（Ⅲ層）がまだら状に混ざり合った範囲を検出した。短軸で半截し、部分的に焼土が入り混じる様子を確認した。

土　層　Ⅲ層が焼けたと思われる暗赤褐色土に、黒色土のⅢ層がまだら状に混ざり込んだ層。若干の炭化物が出土している。

性格・時期　焼土の混在具合から、原位置をとどめておらず、人為的に形成されたものではない可能性がある。人工遺物はなく、炭化物は自然木が焼けたものと思われる。時期は検出面から、擦文時代以降のものであろう。　(新家)





Ｆ－１土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密性	層界の明瞭性	層界の起伏	そ　の　他
1	埴壌土	暗赤褐色	5YR 3/4	強	堅	判　然	平　坦	Ⅲ層が焼けた焼土

図Ｖ－１　遺構位置図、Ｆ－１

3　包含層出土の遺物

(1)　土　器

土器は205点出土した。縄文時代前期後半の円筒土器下層式（Ⅱ群ｂ類）39点、中期前半の円筒土器上層式（Ⅲ群ａ類）35点、中期後半の大安在Ｂ式（Ⅲ群ｂ－２類）131点である。

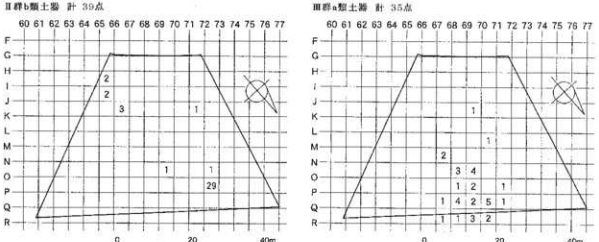
包含層出土土器全体に対する各時期の出土点数の割合は、Ⅱ群ｂ類19.02%、Ⅲ群ａ類17.07%、Ⅲ群ｂ－２類63.90%となっている。Ⅱ群ｂ類は主にO72で、Ⅲ群ａ類は調査範囲中央部海側、Ⅲ群ｂ－２類は主にO72で出土した。各時期の土器の出土点数に対する各層位ごとの出土点数の割合はⅡ群ｂ類はⅤａ層で74.36%、Ⅴｂ層で17.95%、Ⅵ層で7.69%、Ⅲ群ａ類はⅤｂ層で94.29%、Ⅲ群ｂ－２類はⅤａ層で71.71%、Ⅴｂ層で25.37%となっている（表Ⅴ－１、図Ⅴ－２・３）。

縄文時代前期の土器（図Ⅴ－４－２・３、図版11）

２・３はⅡ群ｂ類である。２は口縁である。口唇がLRの縄により刻まれており、器面にはLRの縄文が認められる。内面調整は横ナデで、指頭圧痕が残る。胎土には海綿骨針・繊維・砂を含む。３は胴部である。器面に単軸絡条体の縦回転による回転施文が施されている。内面は磨かれているが、指頭圧痕が残る。胎土には輝石・白色軽石を含んでいる。

表Ⅴ－１　層位別出土遺物一覧

分類 ＼ 層位	土器			土器計	石器											石器計	合計
	Ⅱb	Ⅲa	Ⅲb－2		石鏃	スクレイパー	つまみ付きナイフ	Rフレイク	フレイク	石斧	たたき石	扁平打製石器	石錘	原石	礫		
Ⅲ					1										25	26	26
Ⅴa	29	1	117	147		1			1						144	146	293
Ⅴb	7	33	12	52	3	2	1	1	19	3		2	1	2	1348	1382	1434
Ⅵ	3	1		4	1				2						15	18	22
Ⅶ							1								2	3	3
風倒木攪乱表採・排土等								1	1		1				33	36	36
Ｂ調			2	2											14	14	16
合計	39	35	131	205	5	3	2	2	23	3	1	2	1	2	1581	1625	1830

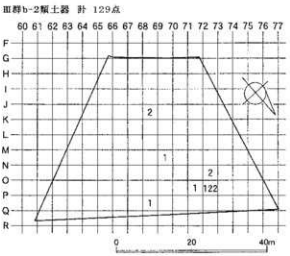


図Ⅴ－２　包含層出土土器分布図(１)

縄文時代中期の土器（図Ⅴ－４－１・４～11、口絵５、図版11）

４～８はⅢ群ａ類である。４は口縁である。口縁肥厚帯および口縁部に貼付された粘土紐の大半は剥落している。残存部分では幅８㎜、厚さ６㎜を計る。断面形は三角形を呈する。口縁肥厚帯と口縁部には幅５～６㎜の箆状施文具による連続刺突文が施されている。内面は横にナデ調整されている。胎土には砂・輝石・角閃石・海綿骨針・白色軽石を含んでいる。５・６は口縁部である。いずれも貼付文をもつ。５の貼付文の幅は上が７㎜、下が５㎜である。厚さは２㎜を計る。貼付にはRLの縄による圧痕が認められる。内面は磨かれており、胎土に輝石・白色軽石を含む。６は貼付に半裁竹管状工具による連続刺突が施され、さらに縄により刻まれている。器面には単軸絡条体による圧痕文がある。内面は剥落している。胎土には砂・白色軽石・海綿骨針を含んでいる。

７は胴部である。器面にはRL＋LRの羽状縄文と思われる地文が施されている。内面調整はミガキで、胎土に砂・白色軽石を含む。８は底部である。底部がわずかに張り出し、器面は横にナデ調整されている。内面はナデ調整され、胎土に砂・白色軽石を含んでいる。



図Ⅴ－３　包含層出土土器分布図（２）

図Ⅴ－４　包含層出土の土器

表Ⅴ－２　掲載土器一覧

掲載番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	破片数 掲載	破片数 非掲載	破片数 総数	部位	文様・調整 外面	文様・調整 内面	胎土 粗密	胎土 含有物	非掲載破片の分布状況
1	Ⅲb－2	O71d O72a O72a	1 2 4	Va Va Vb	1 29 4	89	123	口縁～胴部	口縁突起 RL 縄刻み RL 斜行縄文 RL 縄線文	横ナデ 指頭圧痕	やや密	滑石 輝石 黄白色軽石	O72a, Va・b.
2	Ⅱb	J71	1	Vb	1	0	1	口縁	口唇 LR 縄刻み LR 縄文	横ナデ	密	海綿骨針 繊維 砂	
3	Ⅱb	N69d O72a	1 3	Vb Va	1 2	27	30	胴部	単軸絡条体回転施文	ミガキ 指頭圧痕	密	輝石 白色軽石	O72a, Va.
4	Ⅲa	O71a	3	Vb	1	25	26	口縁	貼付文 筮状工具連続刺突文	横ナデ	密	砂・輝石 角閃石 海綿骨針 白色軽石	N68c, 69b・c, O69a・d, Vb, P67c, W, P68c, 69b, 70b, Vb, P70c, Va, P70d, 71b, Q67d, 68a, 69d, 70a, Vb.
5	Ⅲa	P68a	2	Vb	1	0	1	口縁部	貼付文 RL 縄圧痕	ミガキ	密	輝石 白色軽石	
6	Ⅲa	N67c	2	Vb	1	0	1	口縁部	貼付文 半裁竹管連続刺突文 単軸絡条体の圧痕文	剥落	密	砂 白色軽石 海綿骨針	
7	Ⅲa	P69c	1	Vb	1	0	1	胴部	RL＋LR 羽状縄文	ミガキ	密	砂 白色軽石	
8	Ⅲa	Q69b	1	Vb	2	0	2	底部		ナデ	やや密	砂 白色軽石	
9	Ⅲb－2	467＋90R20	1	B調	2	0	2	胴部	LR 斜行縄文	ミガキ	密	輝石・砂 海綿骨針	
10	Ⅲb－2	N72b	4	Vb	1	1	2	胴部	LR 斜行縄文	ミガキ	密	輝石 滑石 黄白色軽石	N72b, Vb.
11	Ⅲb－2	J68a	1	Vb	2	0	2	胴部	RL 斜行縄文	ミガキ	やや密	砂・輝石 黄白色軽石	

１・９～11はⅢ群ｂ－２類である。１は推定口径23.0cm、残存器高18.7cmを計る深鉢形土器である。123点の破片のうち、34点が接合して復元できた。底部を欠いている。口縁には４か所の小突起をもつ。一対は山形小突起であり、もう一対は粘土を貼り付けた二山の小突起である。図Ⅴ－４－１の右側にある二山の小突起とその間はLRの縄により刻まれている。この二山の小突起の対面側の小突起は欠落しており、右側の断面のラインを借用して図示した。口唇および器面にはLR横回転の斜行縄文が施されている。また、口縁にはLRの縄による幅５mmの条線文が２条巡らされている。この条線文の間はナデ消されている。内面調整は横ナデで、指頭圧痕が認められる。胎土には滑石・輝石・黄白色軽石を含む。

９～11は胴部である。９は器面にLR横回転の斜行縄文が施されている。内面は縦方向に磨かれている。胎土には輝石・砂・海綿骨針を含んでいる。10も器面にLR横回転の斜行縄文が施されている。内面は磨かれているが、大部分が剥落している。胎土には輝石・滑石・黄白色軽石を含む。11にはRL横回転の斜行縄文が施されている。内面は磨かれている。胎土には砂が多く、輝石・黄白色軽石を含んでいる。

（鎌田）

（２）　石器等

器種ごと、層位ごとの出土点数は表Ⅴ－１に示してある。石倉４遺跡出土の掲載石器は石鏃５点、スクレイパー２点、つまみ付きナイフ２点、石斧１点、たたき石１点、石錘１点、計12点である。

石　鏃（図Ⅴ－６－１～５、表Ⅴ－３、図版５・12）

石鏃は出土した５点をすべて掲載した。１～５はいずれも有茎である。１・３・４は両面全体が加工されている。２・５は加工が両面の周縁のみにとどまっている。１・４は先端部を、３～５は基部末端をわずかに破損している。石材は、１が黒曜石、２がメノウ、３～５は頁岩である。

スクレイパー（図Ⅴ－６－６・７、表Ⅴ－３、図版12）

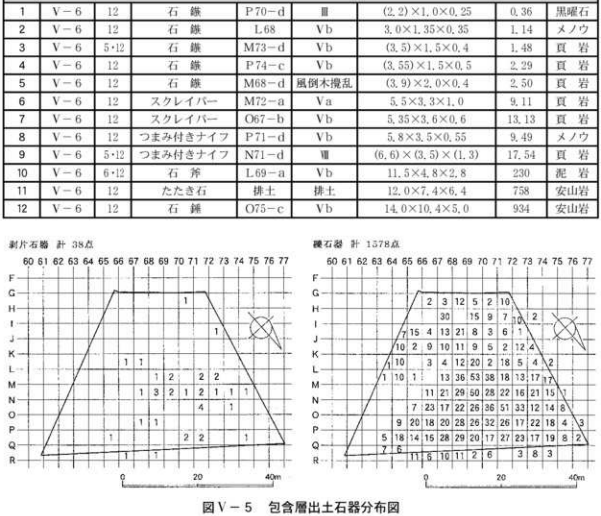
スクレイパーは３点出土している。６は縦長二等辺三角形の素材の片側縁に刃部が作られたものである。腹面の側縁には所々微細な剥離がみられる。７は縦長二等辺三角形の素材の両側縁に刃部が作られている。腹面に剥離は見られない。石材は６・７とも頁岩である。

つまみ付きナイフ（図Ⅴ－６－８・９、表Ⅴ－３、図版５・12）

つまみ付きナイフは２点出土しており、いずれも掲載した。８は表面の両側縁が加工されている。裏面の周縁には微細な剥離が断続的にみられる。素材は左右不対称で、基部末端の片側が錐状に尖っている。９は片側の側縁が両面加工されている。他方の側縁には不連続な微細剥離がみられる。図では基部下方を破損した表現になっているが、側縁の加工が欠損部手前で止まっている（展開図裏面の右下）ので、もともとの素材の形であったとも考えられる。石材は８がメノウ、９が頁岩である。

表Ⅴ－３　掲載石器一覧

掲載No.	図No.	図版No.	分　　類	調査区	層　位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石　材
1	Ⅴ－6	12	石　鏃	P70－d	Ⅲ	(2.2)×1.0×0.25	0.36	黒曜石
2	Ⅴ－6	12	石　鏃	L68	Vb	3.0×1.35×0.35	1.14	メノウ
3	Ⅴ－6	5・12	石　鏃	M73－d	Vb	(3.5)×1.5×0.4	1.48	頁　岩
4	Ⅴ－6	12	石　鏃	P74－c	Vb	(3.55)×1.5×0.5	2.29	頁　岩
5	Ⅴ－6	12	石　鏃	M68－d	風倒木攪乱	(3.9)×2.0×0.4	2.50	頁　岩
6	Ⅴ－6	12	スクレイパー	M72－a	Va	5.5×3.3×1.0	9.11	頁　岩
7	Ⅴ－6	12	スクレイパー	O67－b	Vb	5.35×3.6×0.6	13.13	頁　岩
8	Ⅴ－6	12	つまみ付きナイフ	P71－d	Vb	5.8×3.5×0.55	9.49	メノウ
9	Ⅴ－6	5・12	つまみ付きナイフ	N71－d	Ⅲ	(6.6)×(3.5)×(1.3)	17.54	頁　岩
10	Ⅴ－6	6・12	石　斧	L69－a	Vb	11.5×4.8×2.8	230	泥　岩
11	Ⅴ－6	12	たたき石	排土	排土	12.0×7.4×6.4	758	安山岩
12	Ⅴ－6	12	石　錘	O75－c	Vb	14.0×10.4×5.0	934	安山岩



図Ⅴ－５　包含層出土石器分布図

石　斧（図Ⅴ－６－10、表Ⅴ－３、図版６・12）

石斧は３点出土している。10はほぼ完形で、打ち欠きによる成形後、全体が磨かれている。刃部は良く研磨され仕上げられているが、基部は剥離調整面が多く残る。偏刃である。石材は泥岩である。

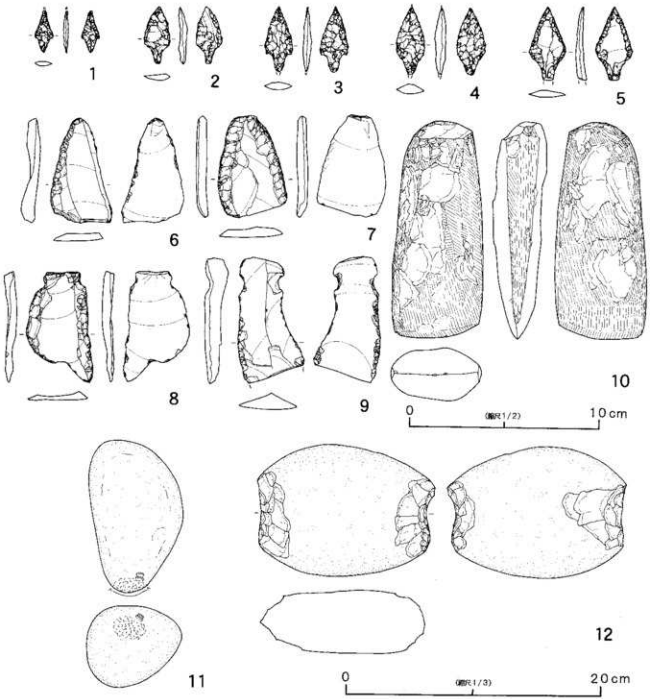
たたき石（図Ⅴ－６－11、表Ⅴ－３、図版12）

たたき石は掲載した１点だけが出土した。礫長軸の一端に使用痕がある。石材は安山岩である。

石　錘（図Ⅴ－６－12、表Ⅴ－３、図版12）

石錘は掲載した１点だけが出土した。扁平な楕円形の素材の、長軸上の両端を打ち欠いて抉りが作られている。長軸に平行した側縁に擦痕等の使用痕がみられないので、石錘に分類した。石材は安山岩である。

（新家）



図Ⅴ－６　包含層出土の石器

Ⅵ　まとめ

1　三次郎川左岸遺跡

三次郎川左岸遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－15－38）は、茅部郡森町字石倉町610番地24に所在する。森市街地から11.5km 北西、三次郎川左岸の河岸段丘上の標高35～43mに立地する、縄文時代後期初頭を主体とする遺跡である。調査範囲は上・中・下位の３つの平坦面と斜面から成る。

工事用道路の切り替えのため、平成15年度は海側1,420m²の調査を行なった。平成16年度は山側の280m²の調査を行なう予定であった。一部を調査した結果、遺構は検出されず遺物も僅かな出土であり、さらに山側には遺物の分布が広がらなかった。そのため65m²の調査で終了した。

現地調査期間は平成15年７月14日～10月28日、平成16年10月13日～10月27日である。２年に亘る調査により土坑１基、焼土１か所を検出した。遺物は土器1,905点、石器等123点の計2,028点が出土した。

（1）　遺　構

検出した遺構は縄文時代前期後半の墓と考えられる土坑１基、縄文時代後期初頭と推定される焼土１か所を検出した。

土坑（P－１）の覆土上層から、Ⅳ群ａ類土器30点、坑底からたたき石１点と礫１点、土坑脇から礫１点が出土した。土器は折り返し口縁とタガ状貼付帯をもつ天祐寺式土器である。単軸絡条体による網目状撚糸文が施されたものと斜行縄文の施されたものがある。いずれも貼付帯間は無文である。

焼土（F－１）からは天祐寺式土器１点が出土した。土層断面の観察から焼土は投げ捨てられたものと考えられる。

（2）　遺　物

遺構から31点、包含層から1,994点の計2,028点が出土した。

土器はP－１から縄文時代初頭の天祐寺式30点、F－１から天祐寺式１点の計31点が出土した。包含層からは、縄文時代前期後半の円筒土器下層式19点、後期初頭～前葉の土器1,716点、続縄文時代の恵山式92点、後北式78点の計1,875が出土した。図Ⅳ－３－１～３は天祐寺式の次の段階のもので、涌元Ⅰ式に併行する時期のものである。

石器等はP－１からたたき石１点、礫１点、土坑脇から礫１点の計３点が出土した。包含層からは、石鏃１点、スクレイパー２点、Ｕフレイク５点，フレイク52点、石斧８点，たたき石３点，扁平打製石器１点、石皿１点、原石21点、礫23点、土製品３点の計120点が出土した。

2　石倉５遺跡

石倉５遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－15－36）は茅部郡森町字石倉町512、513、519番地に所在する。森市街地から11km 北西、三次郎川右岸の山地から海岸に迫る標高60mほどの高位段丘上に立地する、縄文時代前期後半を主体とする遺跡である。調査範囲は沢地形であり、沢の最深部では高低差４m、幅20m以上となる。北西側は三次郎川に向かって傾斜し、下の段丘には三次郎川右岸遺跡がある。また、南東側の同じ高位段丘上には石倉４遺跡がある。

平成15年度は山側部分962m²を調査した。試掘調査の結果、遺物が希薄なため遺構確認調査を行なったが遺構は検出されなかった。これについては平成16年3月に報告書を刊行済である（㈶北海道埋蔵文化財センター　2004『森町　石倉３遺跡・石倉５遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第205集）。

平成16年度は海側部分1,070m²の調査を行い、Ⅴ層から掘り込まれた土坑２基を検出した。遺物は土器319点、石器419点の計743点が出土した。現地調査期間は平成16年５月６日～６月30日である。

（１） 遺 構

尾根部分で１基（P－１）、三次郎川に向かって傾斜する斜面で１基（P－２）、計２基の土坑を検出した。P－１は人為的に埋め戻されており、覆土から23点、坑底から１点、径１㎝弱～10㎝の自然礫が出土した。また、坑底壁際からは長さ64㎝×43㎝×厚さ10㎝、重量34.2kgの台石様の安山岩礫が出土している。P－２も埋め戻されており、その上にⅡ～Ⅴb層の自然堆積層が落ち込んでいる。遺物は出土していない。両者とも伴う遺物が少なく、周辺からの土器の出土も少ないため構築時期は不明である。P－１は土坑の規模、巨礫を伴う特徴から縄文時代後期の所産と考えられる。また、P－２はⅤb層の自然堆積が見られることから縄文時代前期のものの可能性がある。

（２） 遺 物

遺構から24点、包含層から719点の計743点が出土した。

土器は包含層から縄文時代前期後半の円筒土器下層式278点、後期前葉のトリサキ式６点、続縄文時代の恵山式34点の計319点が出土した。図Ⅳ－３－１の恵山式土器は、三次郎川へ下る斜面の調査範囲海側尾根上で一個体まとまって出土した。あたかも移動途中に落として割ってしまったかのような出土状況であった。

石器等はP－１から礫24点、台石１点が出土した。包含層からは、スクレイパー11点、Rフレイク２点、石核４点、フレイク95点、石斧６点、北海道式石冠４点、たたき石８点、扁平打製石器３点、石鋸１点、有孔礫１点、礫258点、現代の陶器片６点の計424点が出土した。

3　石倉４遺跡

石倉４遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－15－34）は茅部郡森町字石倉町511、520、521番地に所在する。森市街地より約10km北西、山地から海岸に迫る標高60mほどの高位段丘面に立地する、縄文時代中期後半を主体とする遺跡である。石倉５遺跡の南東側に隣接する。

調査範囲の1,852m²は工事用道路により分断されており、まず道路の海側部分から調査に着手した。道路切り替えの後、道路より山側部分の調査を行った。現地調査期間は平成16年５月６日～６月30日である。遺構はⅢ層で焼土１か所を検出した。遺物は土器205点、石器等1,625点の計1,830点が出土した。

（１） 遺 構

調査範囲北東部海側のⅢ層で焼土（F－１）検出した。焼土と黒色土（Ⅲ層土）が斑状に混ざり合っており、若干の炭化物が出土した。原位置をとどめておらず、人為的に形成されたものではない可能性がある。炭化物は自然木が焼けたものと思われる。遺物は出土していない。検出面から、擦文時代以降に形成されたものと推定される。

（２） 遺 物

遺物はすべて包含層からの出土である。

土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層式39点、中期前半の円筒土器上層式35点、中期後半の大安在Ｂ式131点が出土した。

石器等は石鏃５点、スクレイパー３点、つまみ付きナイフ２点、Rフレイク２点、フレイク23点、石斧３点、たたき石１点、扁平打製石器２点、石錘１点、原石２点、礫1,581点の計1,625点が出土した。

（鎌田）

平成15年度　包含層調査状況（1）

平成15年度　包含層調査状況（2）

Ｐ－１遺物出土状況

Ｐ－１完掘状況

平成15年度　完掘状況

平成15年度　完掘状況遠景

平成16年度　表土除去後状況

平成16年度　包含層調査状況

平成16年度　完掘状況

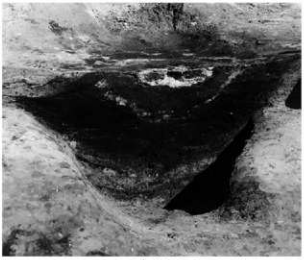
表土除去後状況

包含層調査状況

遺物出土状況

Ｐ－１完掘状況

包含層調査状況



Ｐ－２セクション

Ｐ－２完掘状況

完掘状況

表土除去後状況

包含層調査状況

石鏃（図Ⅴ－６－３）出土状況

つまみ付きナイフ（図Ⅴ－６－９）出土状況

包含層調査状況

石斧（図Ⅴ－６－10）出土状況

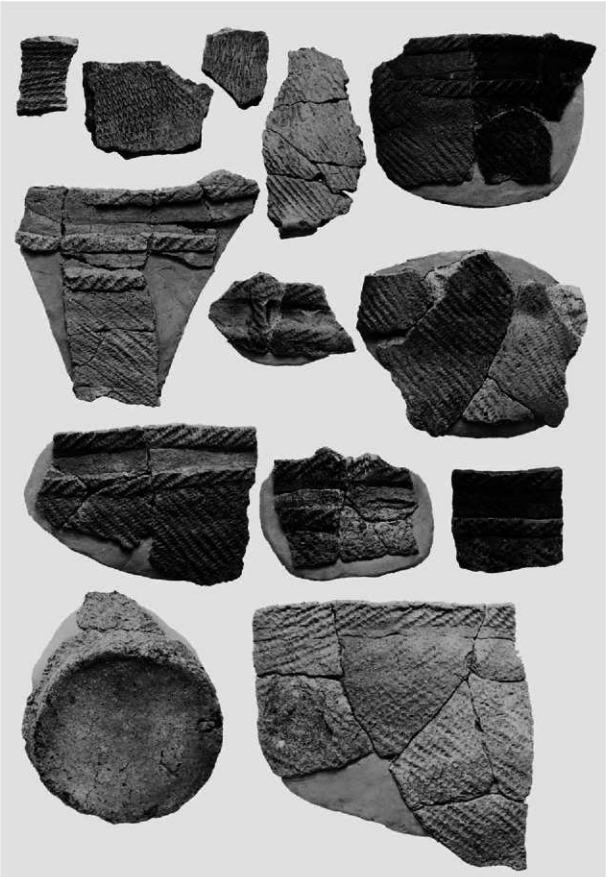
地形測量状況

完掘状況

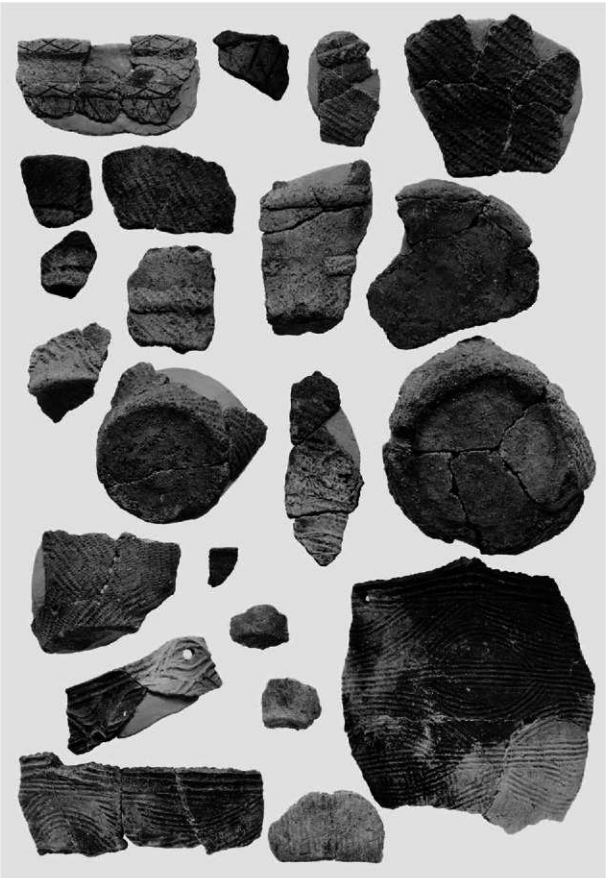
三次郎川左岸遺跡　遺構出土の土器

三次郎川左岸遺跡　包含層出土の土器（1）

図版８



三次郎川左岸遺跡　包含層出土の土器（２）



三次郎川左岸遺跡　包含層出土の土器（3）

図版10

三次郎川左岸遺跡　包含層出土の石器

石倉５遺跡　包含層出土の土器

石倉５遺跡　包含層出土の石器

石倉４遺跡　包含層出土の土器

図版12

石倉４遺跡　包含層出土の石器

石倉付近のヒグマの足跡

ヒグマが滑り落ちた跡

引用・参考文献

石川政治　1968　「函館市天祐寺貝塚」『石器時代』第６号

今井富士夫・磯崎正彦　1968　「第16節　十腰内遺跡」
『岩木山―岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書―』岩木山刊行会

大沼忠春　1981　「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」
『考古学雑誌』第66巻第４号

海峡土器編年研究会編　2003　『第１回　東北・北海道の十腰内Ⅰ式再検討シンポジウム資料』

葛西　勵　1979　「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号

葛西　勵　2002　『再葬土器棺墓の研究－縄文時代の洗骨葬－』再葬土器棺墓の研究刊行会

佐藤忠雄　1975　『鳥崎遺跡』　森町教育委員会

㈶北海道埋蔵文化財センター　2003　『森町　本内川右岸遺跡』（北埋調報第182集）

㈶北海道埋蔵文化財センター　2003　『森町　濁川左岸遺跡－Ｂ地区－』（北埋調報第190集）

㈶北海道埋蔵文化財センター　2003　『森町　本茅部１遺跡』（北埋調報第191集）

㈶北海道埋蔵文化財センター　2003　『森町　倉知川右岸遺跡』（北埋調報第196集）

㈶北海道埋蔵文化財センター　2003　『森町　石倉２遺跡』（北埋調報第197集）

㈶北海道埋蔵文化財センター　2004　『森町　本茅部１遺跡⑴』（北埋調報第199集）

㈶北海道埋蔵文化財センター　2004　『森町　石倉３遺跡・石倉５遺跡遺跡』（北埋調報第205集）

㈶北海道埋蔵文化財センター　2004　『森町　濁川左岸遺跡－Ａ地区－』（北埋調報第208集）

高橋正勝　1962　「涌元遺跡」『北海道の文化』16

高橋正勝　1972a　「北海道における縄文時代中期の終末⑴」『北海道青年人類科学研究会会報』９

高橋正勝　1972b　「北海道における縄文時代中期の終末⑵」『北海道青年人類科学研究会会報』10

高橋正勝　1974　「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」
『北海道の文化』31

高橋正勝　1981　「２．中期の土器　北海道南部の土器」
『縄文文化の研究　第４巻　縄文土器Ⅱ』　雄山閣

成田滋彦　1989　「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観　第４巻　後期・晩期・続縄文』小学館

藤田　登・佐藤　稔・渡部明美　2003　『栗ヶ丘１遺跡　発掘調査概要報告書』森町教育委員会

藤田　登・横山英介・佐藤　稔・本山志郎・三野紀雄　2004　『森川２遺跡』森町教育委員会

松浦武四郎著／高倉新一郎編　1978　『竹四郎廻浦日記　下』　北海道出版企画センター

松浦武四郎著／秋葉　実解読　1988　『武四郎蝦夷地紀行』　北海道出版企画センター

松浦武四郎著／秋葉　実翻刻・編　2001　『松浦武四郎選集　三』　北海道出版企画センター

森町　1980　『森町史』

森田知忠　1981　「北海道」『縄文土器大成３－後期』　講談社

報 告 書 抄 録

ふりがな	もりまち　さんじろうがわさがんいせき・いしくらごいせき・いしくらよんいせき
書　名	森町　三次郎川左岸遺跡・石倉５遺跡(2)・石倉４遺跡
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第219集
編著者名	鎌田　望・新家水奈
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069－0832　北海道江別市西野幌685番地１
発行年月日	西暦2005年３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
三次郎川左岸遺跡	北海道茅部郡森町 字石倉町610－24	1345	B－15－38	42° 09′ 44″	140° 27′ 53″	20030714 ～ 20031028	1,420	高速道路北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設に伴う事前調査
						20041013 ～ 20041027	65	
石倉５遺跡	北海道茅部郡森町 字石倉町512、513、519		B－15－36	42° 09′ 41″	140° 27′ 58″	20040506 ～ 20040630	1,070	
石倉４遺跡	北海道茅部郡森町 字石倉町511、520、521		B－15－34	42° 09′ 38″	140° 28′ 02″	20040506 ～ 20040630	1,852	

ふりがな 所収遺跡名	種　類	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特記事項
三次郎川左岸遺跡	遺物包含地	縄文時代 後期初頭	土坑　１基 焼土　１か所	縄文時代前期後半・後期初頭・続縄文時代の土器1,905点（円筒土器下層式・天祐寺式・恵山式・後北Ｃ２－Ｄ式）。石器等123点（石鏃・スクレイパー・Ｕフレイク・フレイク・石斧・たたき石・扁平打製石器・石皿・原石・礫・ミニチュア土器）	なし
石倉５遺跡	遺物包含地	縄文時代 前期後半	土坑　２基	縄文時代前期後半・後期初頭・続縄文時代の土器319点（円筒土器下層式・トリサキ式・恵山式）。石器等424点（スクレイパー・Ｒフレイク・フレイク・石核・石斧・北海道式石冠・扁平打製石器・石錘・有孔礫・台石・礫）	なし
石倉４遺跡	遺物包含地	縄文時代 前・中期	焼土　１か所	縄文時代前期後半・中期前半・中期後半の土器205点（円筒土器下層式・円筒土器上層式・大安在Ｂ式）。石器等1,625点（石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパー・Ｒフレイク・フレイク・石斧・たたき石・扁平打製石器・石錘・原石・礫）	なし

財北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第219集

森　町
三次郎川左岸遺跡・石倉５遺跡（２）・石倉４遺跡

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書―
平成17年３月20日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069－0832　江別市西野幌685番地－１
TEL(011)386－3231　FAX(011)386－3238
[E-mail]mail@domaibun.or.jp
[URL]http://www.domaibun.or.jp

印　　刷　株式会社北海道機関紙印刷所
〒060－0806　札幌市北区北６条西７丁目
☎(011)716－6141　FAX(011)717－5431